野口 良作

椚山の海軍士官をたどる

令和8年10月5日

野口　豊

趣　旨

本件は、祖父である野口良作特務中尉（戦死時）の約23年間に及ぶ海軍経歴を中心に調査し取りまとめたものである。将来的に説明又はプレゼンテーションを行うことを見据え、各スライドは、16pt又は18ptを主とした。また、作成者は公人でなく、私人として本内容を作成した。

【編集履歴】

令和8年5月18日　富山県入善街椚山公民館HPにおける「ふるさと資料館」で公開用に編集

令和8年7月24日　特務士官となった後の配属先を修正、追加、婚姻等を追加

令和8年10月5日　厚生労働省社会・援護局援護・業務課より「野口良作」に係る旧海軍の履歴等を取り寄せ。
旧海軍で記録された人事記録等の情報を反映

次　第

１　概要（人物要約）
２　生い立ちと海軍への入隊
３　兵・下士官時代の経歴
４　上海勤務と兵曹長時代
５　特務士官としての昇進
６　巡洋艦「天龍」での任務
７　戦死とその後について
８　結語・人物評価
９　残された遺族について

作成者 後書き
主要参考・引用文献一覧表

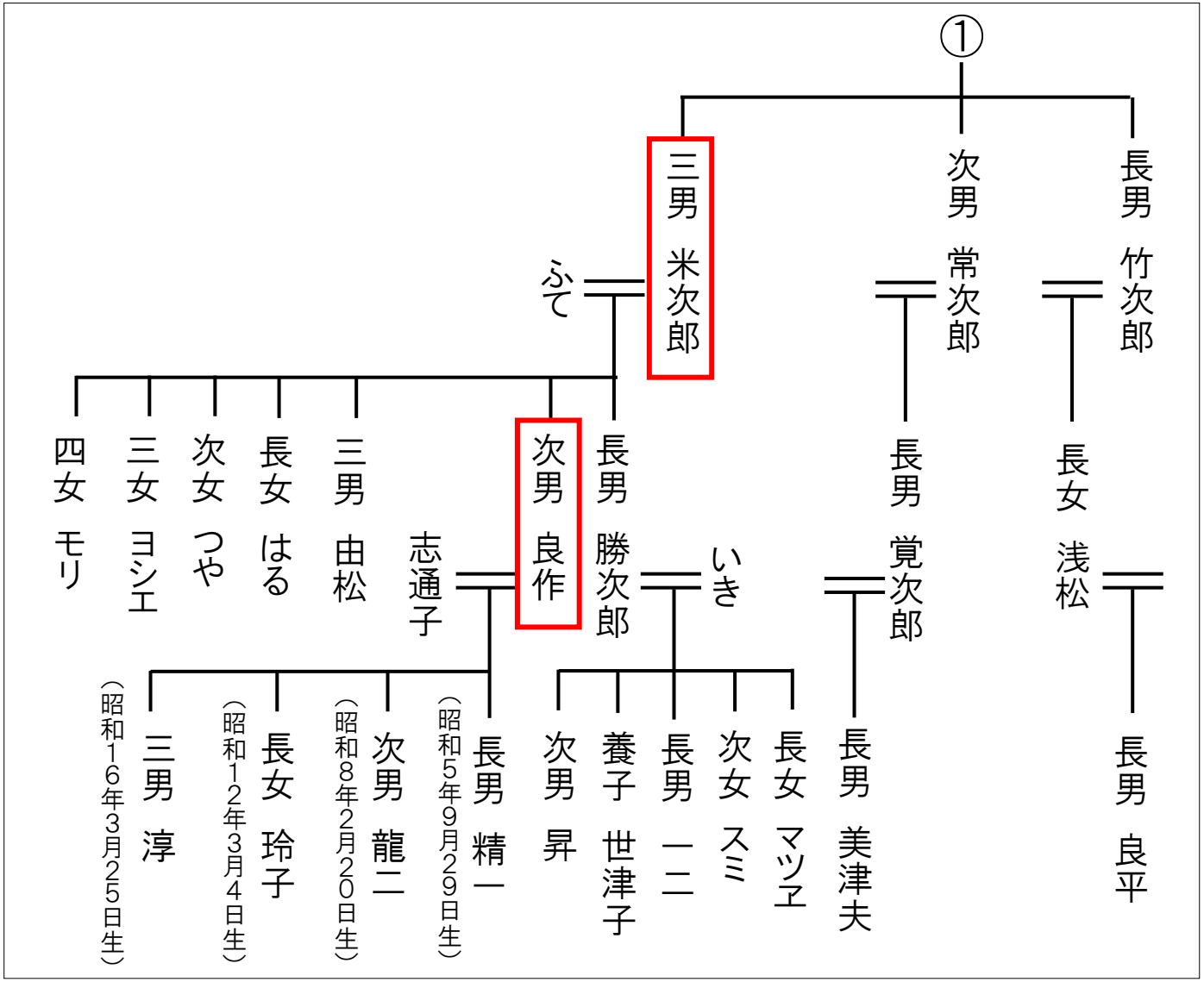


1　概要（人物要約）

項　目	内　容	備　考
生　誕	1902年(明治35年)1月15日	戸籍謄本で確認
出身地	富山県下新川郡入善町椚山	
死没、場所	1942年(昭和17年)10月2日、ニューギニア島東部ラバウル港 巡洋艦天龍艦上(享年41歳)	米軍爆撃機の爆撃による戦死
所属組織	大日本帝国海軍	
専　門	砲　術	
最終階級	特務中尉(戦死後、特務大尉に昇進)	
勲　章	正七位勲四等功五級	
出身校	椚山尋常小学校卒業(12歳)	1914年(大正3年)3月
配偶者、子等	志通子／精一・龍二・玲子・淳	スライド4を参照
墓　所	神奈川県横須賀市馬門山	

野口家　家系図

1902年（明治35年）1月15日、野口良作は、野口米次郎の次男として誕生



①：「同」は調査中

六右衛門 ― 同（不明？） ― 又吉 ―（1828年（文政11年）？）

菩提寺は、善称寺
（富山県下新川郡
入善町東狐1018）
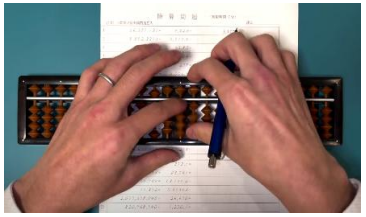
2　生い立ちと海軍への入隊

幼少の頃

○　1902年（明治35年）1月15日野口米次郎の次男として誕生
→ 実家は、農家（小作農）であり、日傭労働、藁仕事などで何とか生計を維持。当時の椚山村は、戸数150戸、人口約500人であり、村は大半が小作農で3人内外の地主が支配(＊1)

○　椚山尋常小学校では、算術、ソロバンが得意であった。特にソロバンは、両手で行う、いわゆる「両手はじき」（右図参考）を身に付けていた。

○　字が上手く、戦後まで椚山尋常小学校（下図参考）の校内で、習字が掲示されていた。



【両手はじき】
右手だけでなく左手も使ってそろばんの珠を動かす技術。計算のスピードと正確性を劇的に向上させることができる。



跡地は椚山公民館、小学校は、統廃合され、現在、入善町立桃李小学校

＊1　野口浩世（「由松」から改名（1992年）、『土木一筋に六〇年』、中西印刷、p21

2　生い立ちと海軍への入隊

椚山尋常小学校卒業後

○　1914年(大正3年)椚山尋常小学校卒業後、中等学校に進学したかったものの、家庭の事情により断念。卒業後、丁稚奉公に出た。(京子氏談)

○　理由は、「家業の「酒屋」の経営状態が良くなかったため、と言われている。以後も勉学できる場所として、海軍を志願した。」(次男　龍二氏談)

→　家業は小作農であり、別に「酒屋」に係る事業を行っていたのか不明

→　小作人の貧農であり、進学させる余裕がなかったためと考えることが妥当である。

野口浩世氏の著書にも「当時の農村における二男三男は卒業即離村就職である。一人でも食扶持を減らさなければならなかった。」(*1)とあり、本人も卒業後、親の指示で京都に行き、就職している。

当時の富山県(*2)における進学できない子供の進路

農業従事	圧倒的に多かった。
出稼ぎ労働	行き先:北海道:開拓・漁業・港湾、樺太:漁業・木材、東京・大阪:土工・雑役、北陸都市部:荷役・運搬炭鉱地域坑夫補助
漁　業	沿岸地域で多く、現金収入を得やすい。
丁稚奉公・商店奉公	都市部や町場で、酒屋、呉服屋、雑貨店、米屋、薬屋で奉公
軍隊(陸軍／海軍)	特に海軍は、技術教育、安定給与、食事保証があり、地方貧困層に魅力

＊1　野口浩世(「由松」から改名(1992年)、前掲書、p34

＊2　当時の富山県の性格は、農業県 出稼ぎ県 半農半漁地域 地方貧困地域であり、進学率は極めて低かった。

参考資料

2　生い立ちと海軍への入隊

1910年代の富山県の職業別人口（推計）

1920年（大正9年）第1回国勢調査から富山県人口は、約72万4千人。同調査を元に1910年代における富山県の職業別人口を推定すると下表のとおり。

職業分類	推計割合	推計人口規模	弱　点
農業	約65～70%	約47～50万人	小作農：土地に制約
漁　業	約5%前後	約3～4万人	不安定
商　業	約7～8%	約5万人	昇進困難
工業・職工	約8～10%	約6～7万人	昇進困難
官公吏・軍人	約1～2%	約1万人	危険、長期拘束
日雇・雑業	約5%	約3万人	低賃金、危険
その他	約5%	約3万人	ー

1910年代の富山県の特徴

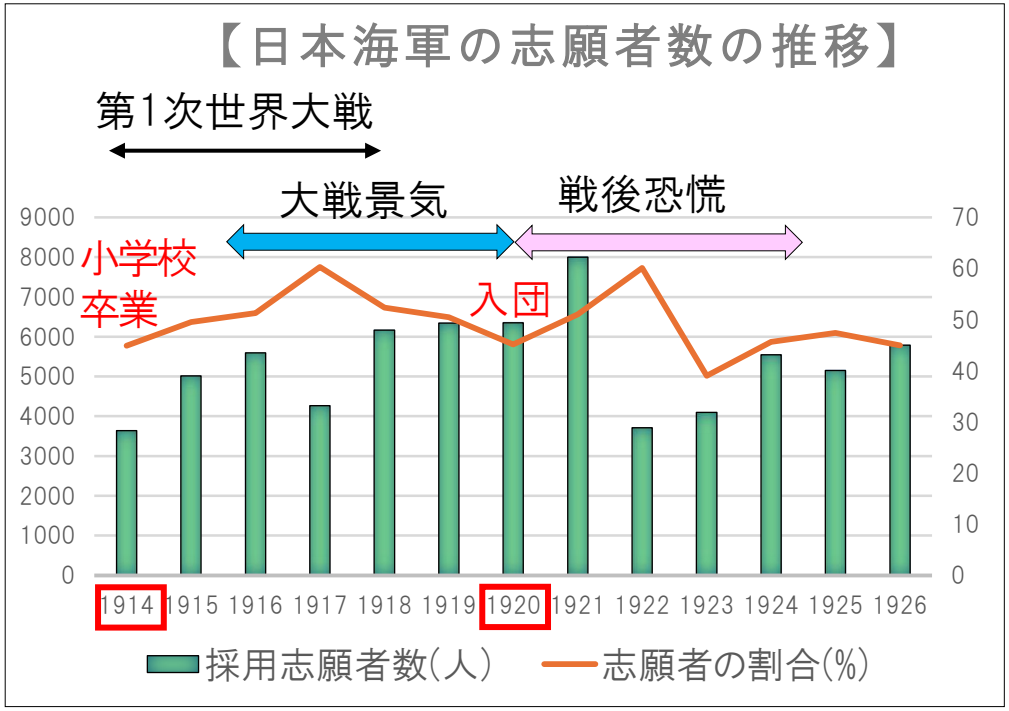
農村人口比率が極めて高い・若年人口が多い・多産社会

＊1　野口浩世（「由松」から改名（1992年）、前掲書、p34
＊2　当時の富山県の性格は、農業県 出稼ぎ県 半農半漁地域 地方貧困地域であり、進学率は極めて低かった。

2　生い立ちと海軍への入隊

海軍の志願者の状況等

1910年代及び20年代における海軍における志願者の状況、募集に係る施策等を確認することで「野口良作」が海軍を志願した理由を推察する。



○ **海軍の志願兵の特典事項**(*3)
- ・陸軍より進級できる。
- ・各種手当ての収入
- ・上陸外出、夏季・冬季の休暇
- ・軍港で各種慰安施設、嗜好品場所

○ **大戦景気：志願者は減少**(*3)
- ・景気が良い時、軍隊は不人気
- ・重工業の発達、中等教育の普及により進学、職工など職業選択の幅が拡大

○ **終身恩給制度**(*3)
- ・11年間の在営(軍に勤務)が要件
- ・陸軍志願者の現役：3年→ 2年
- ・海軍志願者の現役：8年→ 6年

○ **1918年(大正7年)海軍志願兵条例を改正**(*3)
- ・鎮守府だけでなく、郡市長を徴募官に任命し、志願者の割当てを制度化(**郡市長村に志願者集めのノルマ**を課した。) → 全国各地で志願者集めが本格化

海軍志願者が減少傾向にある中で実施された海軍の各施策が、「野口良作」の海軍入団への決意に何らかの影響を与えた可能性は否定できない。

＊3　木村美幸(2022年)、『日本海軍の志願兵と地域社会 』、吉川弘文館、p36、p37、p43、p46

2　生い立ちと海軍への入隊

海軍の入隊

○　1919年(大正8年)6月1日、満17歳で海軍(舞鶴海兵団(京都府舞鶴市中舞鶴))に入団
→　1943年(昭和18年)、海軍合同沿葬及び村葬の公報に、舞鶴海兵団への入団が明記
→　徴兵は、毎年1月入団で約4か月半、志願は、6月入団で約5か月半の基礎教育を受けた。(*4)
→　基礎教育は、初年兵として必要な海軍基礎教練、規律、精神教育等(下図参考:同団の教育風景を伝える絵はがき)


ハンモック


軍事教練


行進訓練


食　事

○　1919年(大正8年)11月1日4等水兵に昇進して同団を修業。舞鶴を母港とする防護巡洋艦「対馬」に乗り組みを命ぜられた。
→　1919年当時、防護巡洋艦「対馬」は、シベリア出兵に伴う沿海州方面の警備任務に従事

＊4　太平洋戦争研究会(2003年)、『江田島海軍教育』、新人物往来社、p192～195

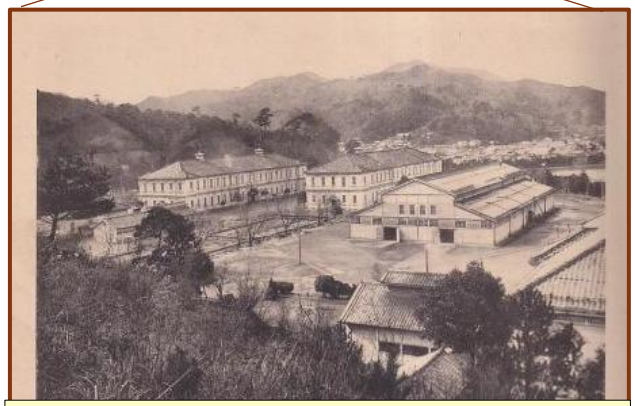
参考資料

舞鶴海兵団の場所





京都府
舞鶴



舞鶴海兵団（大正時代）

舞鶴海兵団は、舞鶴鎮守府設置と同時に**中舞鶴**に設置。しかし、軍縮条約締結後、要港部に降格され、海軍機関学校に転用。1939年（昭和14年）4月東舞鶴に再度、設置

3　兵・下士官時代の経歴

旧海軍の人事記録から兵･下士官時代の経歴は下表のとおり。

年月日(年齢)	階　級	経歴等
1919年(大正8年)6月1日(17歳)	5等水兵	舞鶴海兵団に入団
同年11月1日	4等水兵	昇任、防護巡洋艦「対馬」乗組み
1920年(大正9年)4月1日(18歳)	3等水兵	昇　任
同年10月31日		第45期普通科練習生として海軍砲術学校へ入校 →ここで「野口良作」は「砲術」を特技とする専門職の道に進む。
同年11月1日	2等水兵	昇任、「大正三年乃至九年戦役(第1次世界大戦に係るシベリア出兵)」の功による勲八等瑞寶章を授与 → 金180円を賜る。
1921年(大正10年)5月7日(19歳)		海軍砲術学校普通科練習生教程卒業(「普通科砲術章」を獲得)(*5) 戦艦「薩摩」乗組み(母港:横須賀)
同年11月1日	1等水兵	昇　任

＊5　坂本明(平成26年)、『ミリタリーユニフォーム大図鑑』、文林道、p90

3　兵・下士官時代の経歴

年月日(年齢)	階　級	経歴等
1921年(大正10年)11月7日(19歳)	1等水兵	戦艦「鹿島」乗組み(母港:舞鶴)
1922年(大正11年)4月25日(20歳)		母「ふて」の病気看護のため、14日間の帰省許可　→ 以前から「ふて」の容態が良くなかったため、舞鶴へ転勤になったのか(推測)
同年5月10日		舞鶴海兵団入団(配置、役割不明)
同年12月1日		呉鎮守府所管に転籍
1923年(大正12年)4月1日(21歳)		舞鶴防備隊に転勤 →　舞鶴湾や周辺沿岸の防衛、掃海、港湾警備などを担った部隊
同年5月4日		軽巡洋艦「大井」乗組み(母港:呉)
同年12月7日		呉海兵団に転勤
1924年(大正13年)2月29日(22歳)		軽巡洋艦「天龍」乗組み(母港:呉)
同年5月1日	3等兵曹	22歳で下士官に昇任 → 早い昇進速度 下士官の任用試験(甲乙種(*A))、勤務成績、品行、実務技能から下士官の合否が判定(権限:鎮守府長官)(*6)

＊6　池田清、野村実ほか、近現代史編纂会(2001年)、『海軍艦隊勤務』、新人物往来社、p22～37

3　兵・下士官時代の経歴

兵は、艦艇の運用や戦闘を直接担う海軍の根幹をなす兵種（水兵科）



【夏　服】



【冬　服】

階級章（右腕）

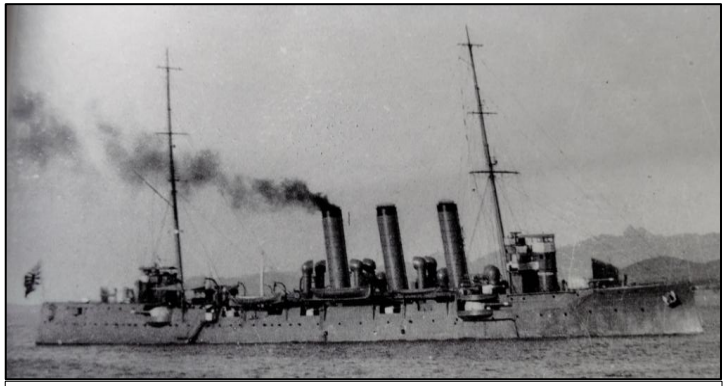


普通科特技章（左腕）



3　兵・下士官時代の経歴

野口良作が兵時代のとき、乗組んだ艦は以下のとおり。



防護巡洋艦「対馬」
竣工：1904年2月14日、基準排水量 ：3,120トン
長さ ：102.01 m、幅 ：13.44 m、吃水 ：4.90 m
速力 ：20.00 kt、乗員数 ：311名



戦艦「薩摩」
竣工：1910年3月25日、基準排水量 ：19,200トン、長さ ：137.16 m、
幅 ：25.45 m、吃水 ：13.56 m、速力 ：19.13 kt、乗員数 ：887名



戦艦「鹿島」
竣工：1906年5月23日、基準排水量 ：16,400トン、長さ 129.54m、
幅 ：23.81m、吃水 ：13.41 m、速力 ：19.2 kt、乗員数 ：815名



軽巡洋艦「大井」
竣工：1921年10月3日、基準排水量 ：6,900トン、長さ 152.4m、
幅 ：14.17m、吃水 ：4.8 m、速力 ：33.6kt、乗員数 ：446名

＊軽巡洋艦「天龍」にも乗組んでいるが、それは後述

3　兵・下士官時代の経歴

年月日(年齢)	階　級	経歴等
1924年(大正13年)8月26日(22歳)	3等兵曹	第54期高等科練習生として海軍砲術学校へ入校
1925年(大正14年)7月4日(23歳)		・海軍砲術学校高等科練習生教程卒業(火工術専修　→　下士官を対象に、火薬、弾薬、信管、爆薬などの「火工兵器」に関する高度な専門知識と技術を習得させるための専門教育課程) →　**砲術分野の高度な技能を持つ「特修兵」(術科の名人)**となる。(＊7) ・軽巡洋艦「天龍」乗組み(母港：呉)
1926年(大正15年)5月1日(24歳)	2等兵曹	昇　任
同年11月5日		海軍砲術学校に転勤(配置不明)
1927年(昭和2年)11月1日(25歳)	1等兵曹	昇　任
1928年(昭和3年)11月16日(26歳)		大禮記念章授与(p20参照)
1929年(昭和4年)2月28日(27歳)		叙勲七等授瑞寶章を受賞
同年11月16日		軽巡洋艦「鬼怒」乗組み(母港：呉)

＊7　『戦史叢書第031巻　海軍軍戦備<1>昭和十六年十一月まで』、第二編　軍備計画の推移　第四章　人的軍備、p635

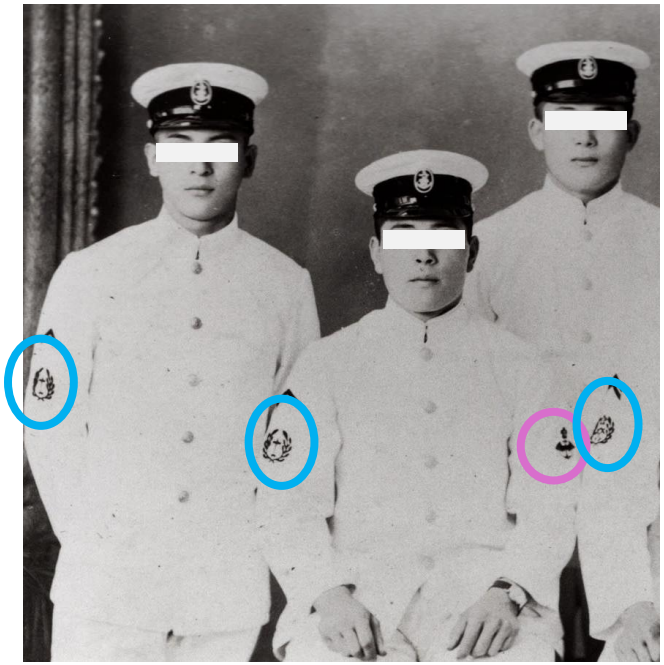
3　兵・下士官時代の経歴

年月日(年齢)	階　級	経歴等
1930年(昭和5年)6月5日(28歳)	1等兵曹	志通子(加藤家)と入籍
同年12月8日		長男精一氏 出生届(誕生:9月29日)
1932年(昭和7年)11月4日(30歳)		防護巡洋艦「平戸」乗組み(母港:佐世保(推定)
1933年(昭和8年)5月1日(31歳)	海軍 兵曹長	・昇任(*8) ・戦艦「扶桑」乗組み(母港:呉)
同年10月29日		次男龍二氏 出生届(誕生:10月29日)
同年11月1日		呉鎮守府附、呉海兵団に服務
1934年(昭和9年)1月25日(32歳)		重巡洋艦「那智」乗組み
同年4月1日		上海特別陸戦隊附兼第三艦隊司令部附　→　配置の時期から陸上戦闘には直接従事していないものと推定。上海市内で巡察する写真あり。(p21参照)
同年4月29日		昭和六年及至九年事変(*9)の功による青銅桐葉を授与(p18参照) → 金180円を賜る。
1935年(昭和10年)5月6日(33歳)		呉海兵団附

＊8　現役海軍特務士官及准士官名簿
＊9　満洲事変(1931年9月勃発)と第1次上海事変(1932年1月勃発)の一連の軍事行動、およびその後の1933年5月の塘沽協定による停戦、さらには1934年(昭和9年)の論功行賞や事後処理までを含めた一連の動乱を指す。

3　兵・下士官時代の経歴

下士官は、兵からの昇進者であり、士官との間に入って兵を統率する。制服に着用する階級章と特技章の場所は、兵と同様である。



【夏　服】



【冬　服】

階級章（右腕）



高等科特技章（左腕）



3　兵・下士官時代の経歴

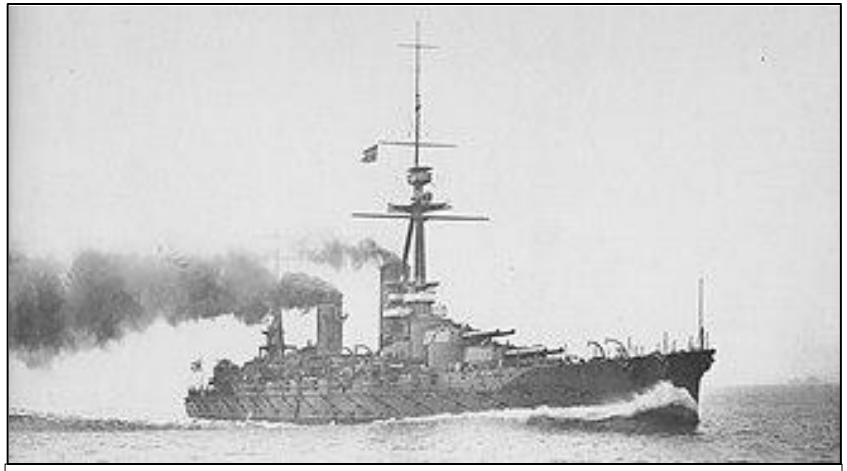
野口良作が下士官時代のとき、乗組んだ艦は以下のとおり。



軽巡洋艦「鬼怒」
竣工:1922年11月10日、基準排水量 : 5,170トン、長さ : 162.1 m、幅 : 14.17 m、吃水 : 4.8 m、速力 : 36.0 kt、乗員数 : 450名



防護巡洋艦「平戸」
竣工:1912年6月17日、基準排水量 : 5,000トン、長さ 144.8m、幅 : 14.2m、吃水 : 5.1m、速力 : 26.0kt、乗員数 : 414名



戦艦「扶桑」
竣工:1915 11月8日、基準排水量 : 29,326トン、長さ 205.13m、幅 : 28.65 m、吃水 : 13.16 m、速力 : 22.93 kt、乗員数 : 1276名

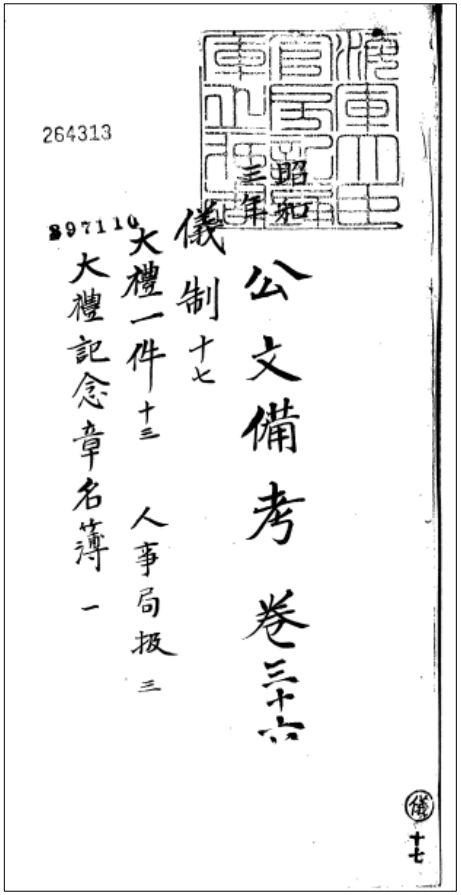


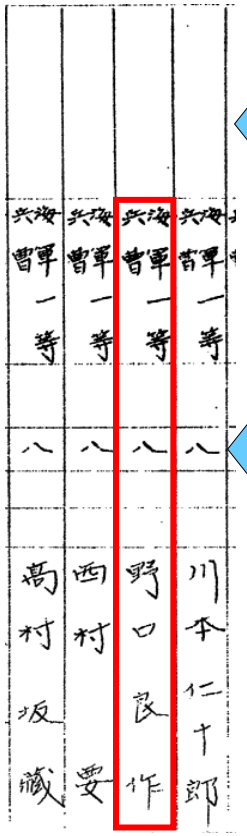
重巡洋艦「那智」
竣工:1928年11月26日、基準排水量 : 610902トン、長さ 203.76 m、幅 17.86 m、吃水 : 10.97m、速力 : 35.6kt、乗員数 : 704名

＊軽巡洋艦「天龍」にも乗組んでいるが、それは後述

3　兵・下士官時代の経歴

1928年(昭和3年)、「大禮記念章(たいれいきねんしょう)」の付与名簿に「海軍1等兵曹　野口良作」が明記されている(下左図)(*10)





「所属」。士官はほとんど明記されているものの、下士官はいずれも明記されず。(*7)

「勲」



大禮記念章

この大禮記念章は、昭和天皇の即位の大礼(昭和3年)に、参列した者又はその事務、要務に関わった者に対し授与された記念章(勲章)である。この資料では、即位の大礼において、「野口良作」がどのような役割を担ったのか明記されていない。

＊10　昭和3年公文備考巻36、『大禮記念章名簿』、海軍省

3　兵・下士官時代の経歴

残されている記念章に「昭和六年乃至九年支那事変従軍記章」（下左図）がある。昭和9年に上海特別陸戦隊附兼第三艦隊司令部附となったため、第1次上海事変（昭和7年）など直接大規模な戦闘には従事していない。現地で第3艦隊司令部が置かれた装甲巡洋艦「出雲」を拠点として、警備等に従事していたものと推定





表



裏

上海に派遣中、「野口良作」の同僚が、上海でで知り合った女性と、帰国後、上海に渡り、結婚したエピードが残されている。（次男龍二氏談）

【第三艦隊】（第1次上海事変のために編成）

- **直属：出雲・能登呂・上海特別陸戦隊**

◆第一遣外艦隊
防護巡洋艦：平戸、対馬
軽巡洋艦：天龍
装甲巡洋艦：常磐
駆逐艦：浦風、桃・樫・檜・柳
砲艦：安宅、宇治、伏見・隅田・勢多・比良・保津・堅田・鳥羽・熱海・二見

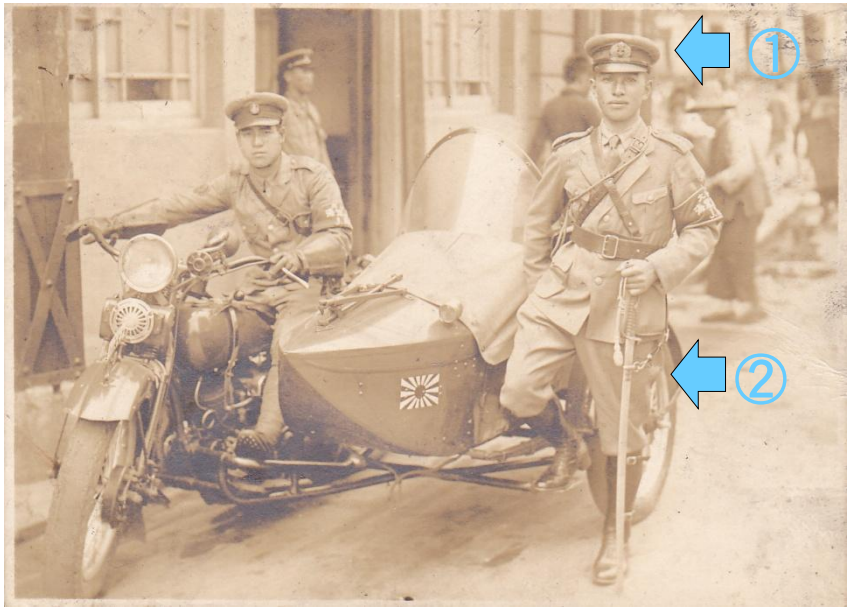
◆第二遣外艦隊
軽巡洋艦：球磨
装甲巡洋艦：八雲
駆逐艦：若竹・呉竹・早苗・早蕨、朝顔・夕顔・芙蓉・刈萱

◆第3戦隊：那珂・阿武隈・由良

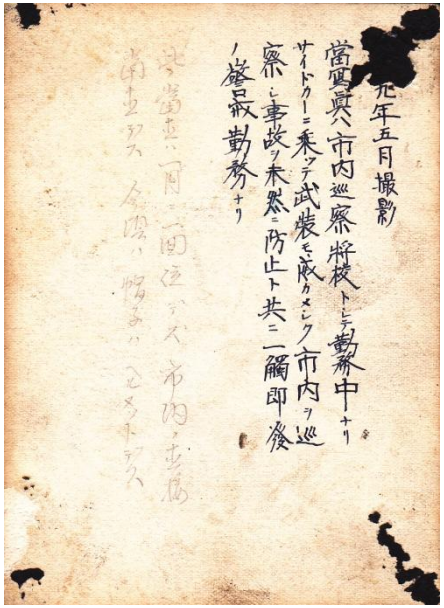
◆第1水雷戦隊
軽巡洋艦：夕張
第22駆逐隊：皐月・水無月・文月・長月
第23駆逐隊：菊月・三日月・望月・夕月
第30駆逐隊：睦月・如月・弥生・卯月
第1航空戦隊：加賀、鳳翔
第2駆逐隊：峯風、澤風、矢風、沖風

4　上海勤務と兵曹長時代

1934年（昭和9年）、上海海軍特別陸戦隊に警備勤務。いつから配置されたのか、また、活動内容に係る記録なし。



【上海市内の巡察に向かうため、サイドカーに乗り込もうとする野口良作兵曹長】



【左写真の裏面】

①制帽の帽章の種類から階級が判明



下士官（3～1等兵曹）

准士官（兵曹長）

○　**上海海軍特別陸戦隊**

1932年（昭和7年）10月1日、上海に特別陸戦隊を置くことを内容とした「海軍特別陸戦隊令」が制定。鎮守府から独立した常設部隊に昇格。編制：2個大隊基幹の約2000人。編成における兵曹長は、小隊長の役目を担っていた。（*11）

○　②帯剣規定

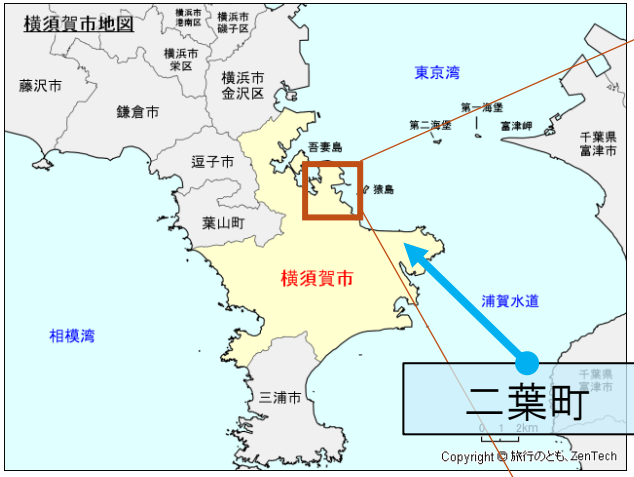
海軍服制第116条により、職務命令下で許可されており、上海では指揮者・巡察任務に従事する兵曹長は帯剣していた。

＊11　大日本帝国海軍、『上海海軍特別陸戦隊写真帖』（昭和8～10年頃撮影）、防衛研究所所蔵

3　兵・下士官時代の経歴

○ 「野口良作」は、自身の特技職である「砲術」（普通科／高等科／特修科砲術練習生教程）を習得するため、横須賀砲術学校にそれぞれ入校

○ 1930年（昭和5年）4月8日（28歳）、結婚。婚姻届けは、横須賀市二葉町（京浜急行線浦賀駅近く）の住所。また、同年9月29日、長男が誕生。このときの出生届の住所は、神奈川県横須賀市公郷町の住所。さらに1933年（昭和8年）2月22日（31歳）、次男が誕生。出生届の住所は、長男と同じ。



1930年から1933年の間、「野口良作」は、呉勤務が多く、生活（家族）の拠点が横須賀であったのか不明確である。
→単身赴任生活か。



【横須賀市全景（1929年）】(*12)

*12　国際日本文化研究センター 所蔵地図データベース

5　特務士官としての昇進

1935年（昭和10年）10月10日、海軍兵学校選修学生（第16期）として、入校し、1937年（昭和12年）6月25日卒業。特務少尉（特務士官）に昇進した。

○ **選修学生制度**

1920年（大正9年）から1942年（昭和17年）の間、優秀な准士官（兵曹長）及び1等兵曹の中から選抜して、生徒教育に準じた教育を行う課程。兵から入団する者にとって、海軍士官となる唯一の道であった。

○ **特務士官制度**

准士官中、所定年限（進級停止）以上、在職勤務し、かつ技能卓抜、人物優秀な者を選抜した。（＊13）

○ **特務士官に係る呼称等**

選修学生を卒業し、士官とってもその称号には「特務」が付され、海軍兵学校生徒からの将校とは分別されていた。

◆ 昭和9年4月1日以降、「特務大尉」から「少佐」へと佐官に進級できる道が開かれ、少佐には「特務」は付されなかった。（＊13）

◆ 昭和17年7月15日から特務士官制度が改正され、同年11月1日から「特務」が除かれることになった。ただし、同年10月2日「野口良作」が戦死しても、舞鶴鎮守府大東亜戦争戦没者合同海軍葬儀弔辞弔電等には、「特務大尉」と記載されており、「特務」は引き続き用いられていた。

＊13 海軍編集委員会、『海軍』、誠文図書及び服部純昌（1986年）、『父子二代海軍戦記ー海軍特務士官と学徒士官ー』、宝印刷、p134

5　特務士官としての昇進

海軍兵学校は広島県江田島に所在、職員・家族用官舎も同敷地内に設置されていた。



生徒館



従道小学校



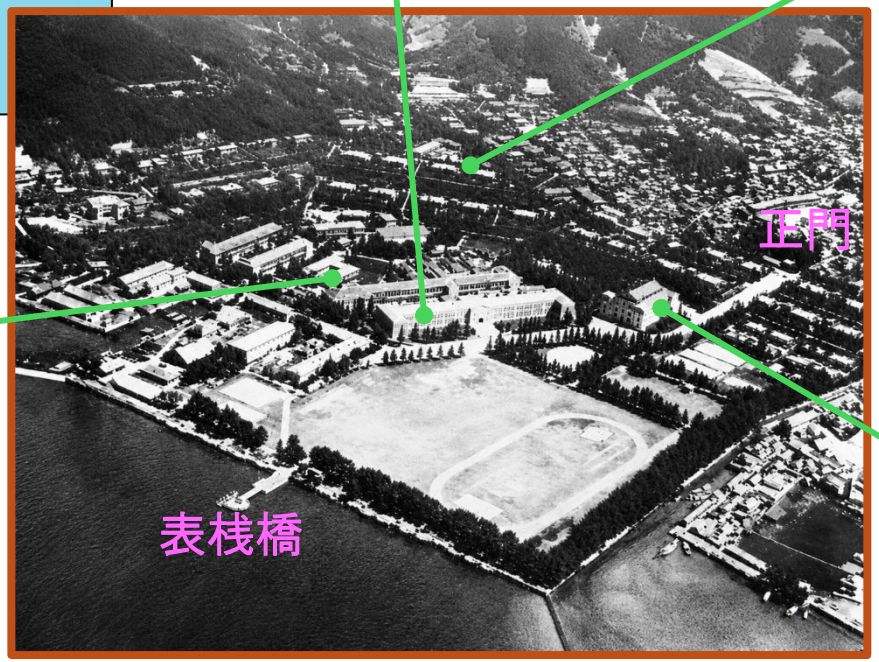
長男　精一氏、次男　龍二氏は、この小学校に通っていた。

従道小学校は、海軍兵学校在職員等の子息が通う学校として、設置。海軍大臣を歴任した西郷従道の名前から命名

教育参考館



1936年(昭和11年)、日本海軍の歴史と伝統保存、自己修養と学術研鑽の資とすることを目的として建てられた施設



海軍兵学校全景（昭和10年頃）

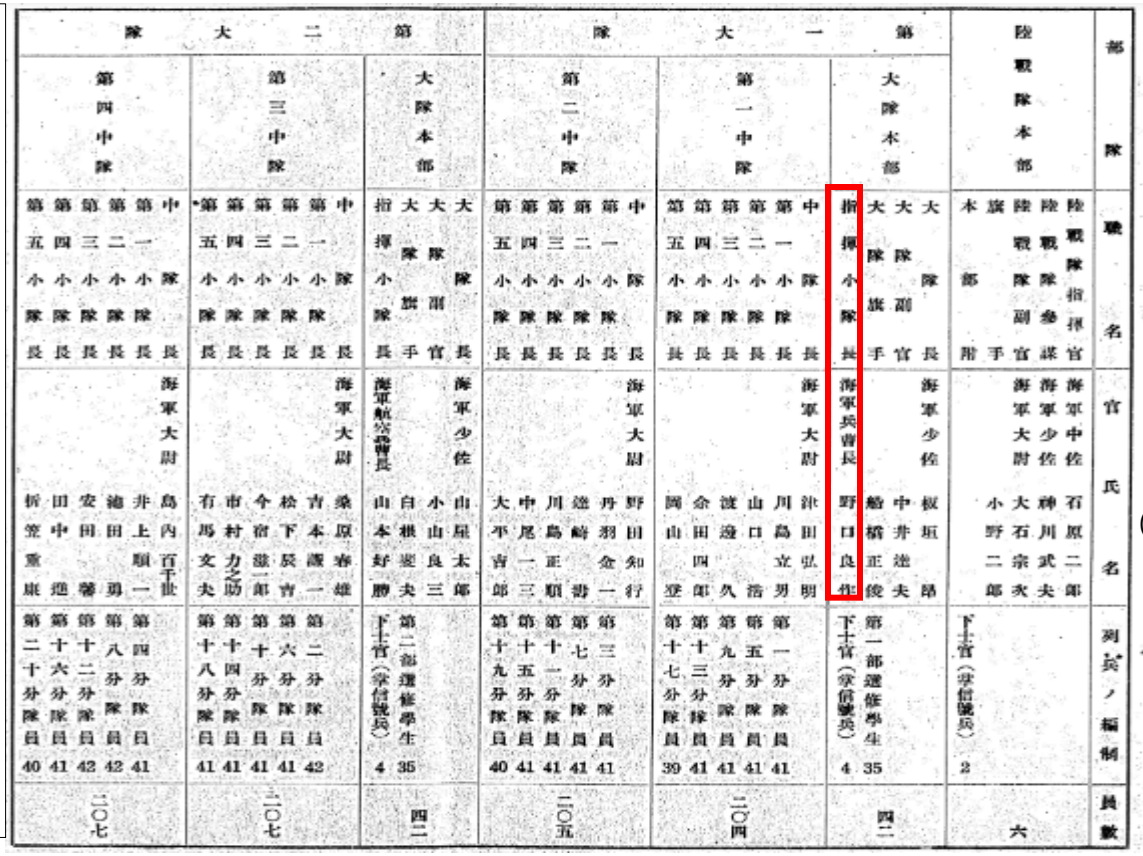
大講堂



5　特務士官としての昇進

1936年（昭和11年）10月27日、「野口良作」が海軍兵学校に入校して約1年後、天皇陛下が海軍兵学校を行幸された。この際、「野口良作」は、観兵式で第1大隊の大隊本部指揮小隊長を務めた。当時作成された記念写真集の巻刊にある参加者名簿には、第16期選修学生の1番目に「野口良作」が記されている。

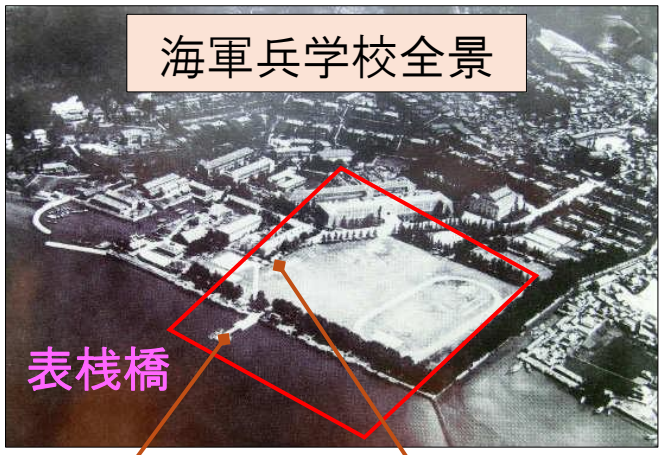
【当日の日程】(*14)
0910　御召艦愛宕（重巡洋艦）江田内入港（投錨）
0935　上陸（桟橋）
0945(1000) 海軍兵学校長、現状奉上
1005(1020)　観兵式
1022(1125)教育参考館御巡覧
1410(1505)生徒作業御覧
1630　御召艦愛宕御乗艦
1700　御召艦愛宕　江田内御出港


観兵式部隊編制（*12）

＊14　海軍兵学校長（1936年）、『行幸儀禮等に関する件報告。兵學第312号』、（アジア歴史資料センター所蔵）

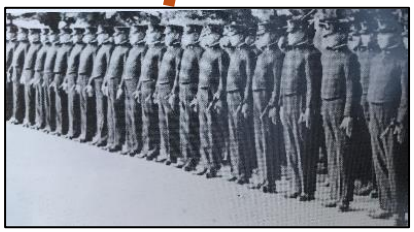
5　特務士官としての昇進

観兵式の実施要領と当日の状況

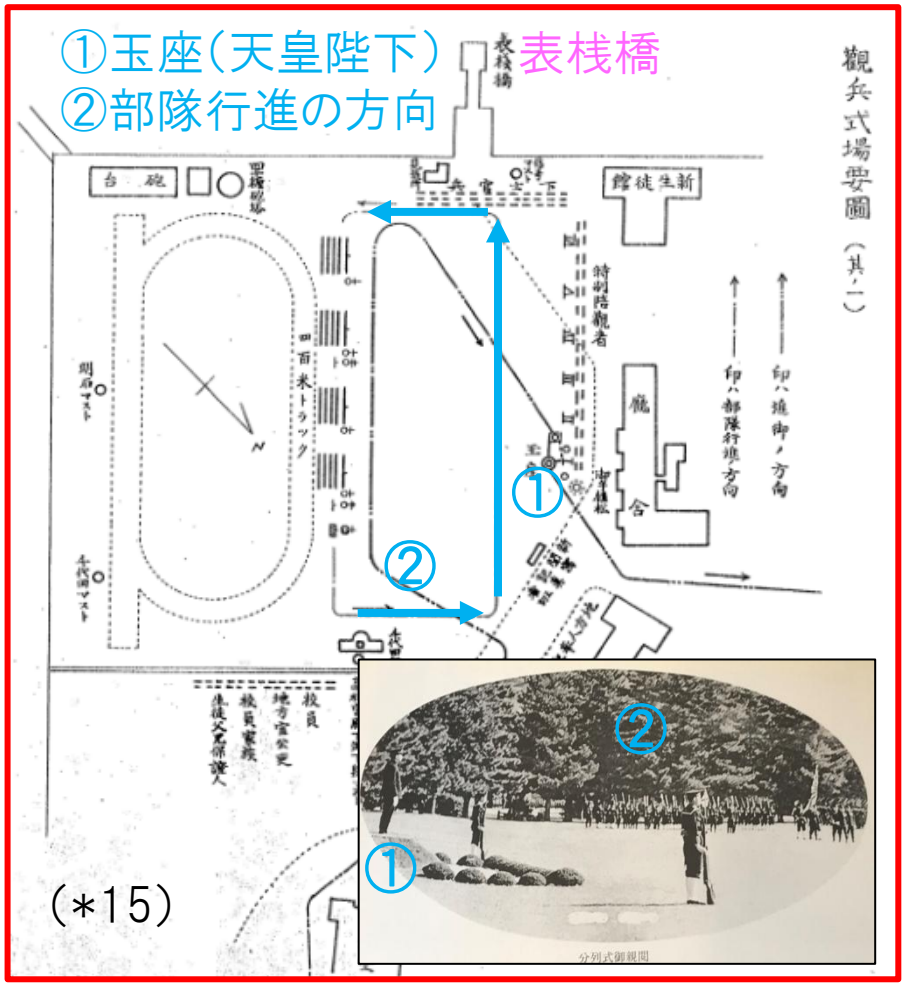




表桟橋から大講堂に
移動中の行幸一行



生徒奉送（出迎え）



（*15）

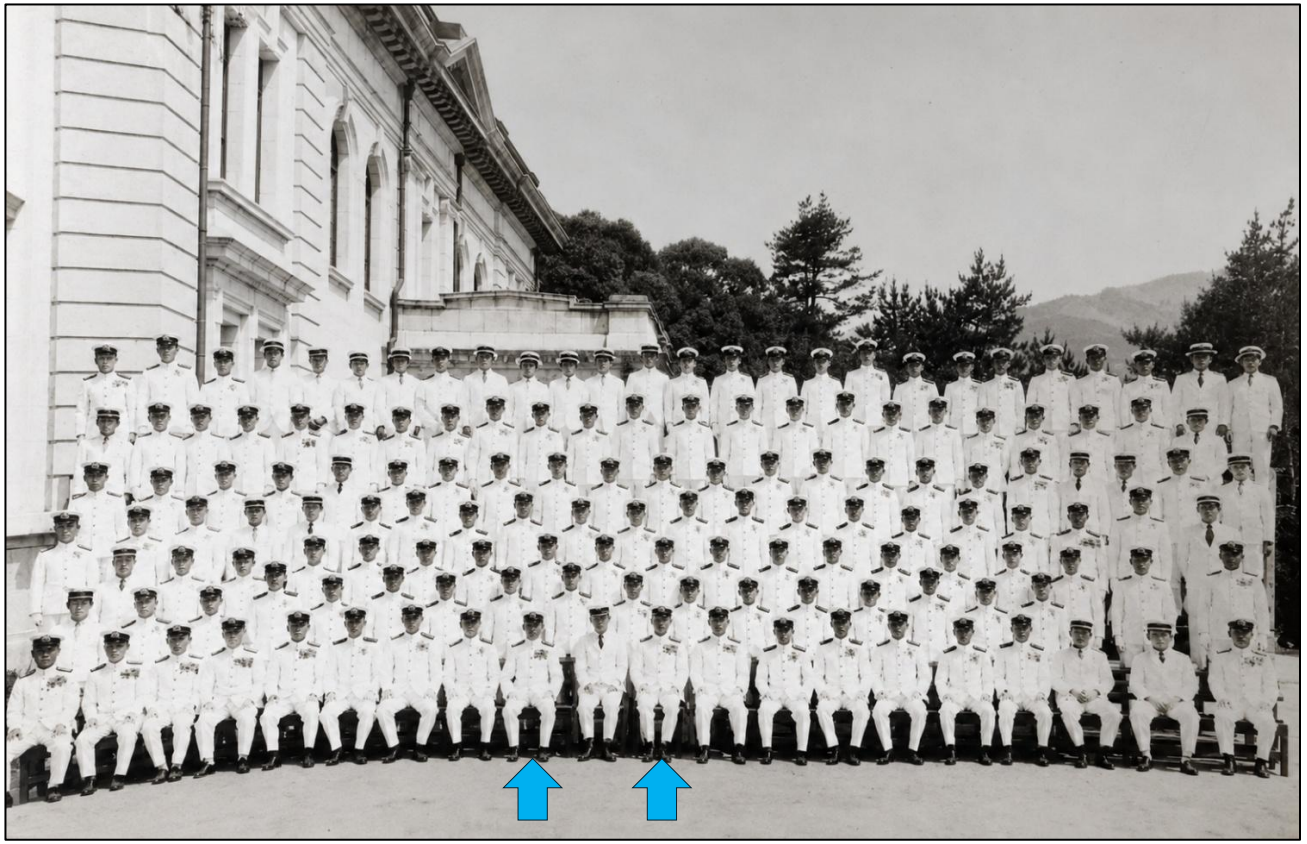
観兵式（当日の状況）

＊15　海軍兵学校長（1936年）、前掲書、（アジア歴史資料センター所蔵）

5　特務士官としての昇進

第16期選修学生は、計70名が入校。1937年（昭和12年）6月25日「野口良作」は、優等賞を獲得して卒業。大講堂前で撮影された卒業式の記念写真が残されている。（下図のとおり。）同日付で、約1か月間、実務練習として戦艦「日向」乗り組み、8月13日付、潜水母艦「大鯨」乗り組みとなった。

なお、同年3月4日（36歳）、江田島能美町で長女が誕生している。



野口良作　海軍兵学校 校長　中将　出光 万兵衛



＜左写真から拡大し、カラー化処理＞

5　特務士官としての昇進

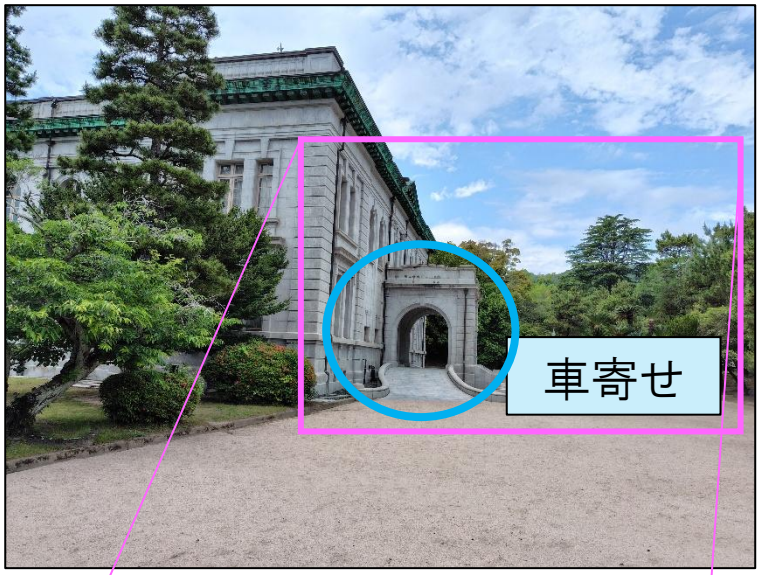
大講堂



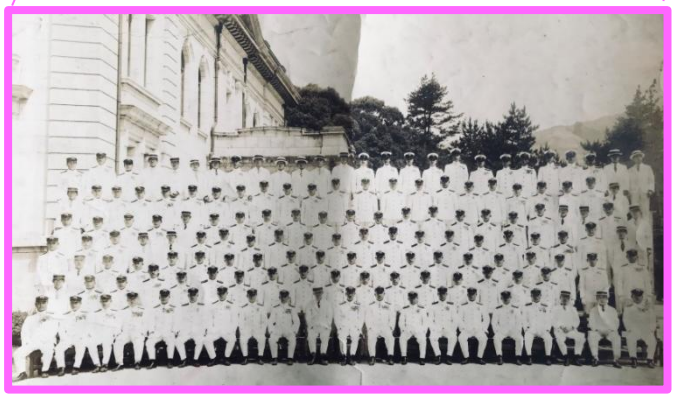
1917年(大正6年)、海軍兵学校生徒の入校式や卒業式などのために建築。約2000人の収容能力（下図講堂内）



反対側



大講堂の主賓用玄関。天皇陛下や皇族用の方々のための玄関



選修学生16期生の集合写真は、ここで撮影

5　特務士官としての昇進

野口良作は、1937年(昭和12年)12月1日軽巡洋艦「球磨」に乗り組み、1938年(昭和13年)12月15日まで勤務(*16)。「球磨」での配置、役職等は不明



軽巡洋艦「球磨(くま)」(母港:呉)

要　目	内　容
就役/戦没	1920年8月31日/1944年1月11日
基準排水量	5,100ﾄﾝ(常備:5,500ﾄﾝ)
全長/幅/喫水	162.4m/14.2m/8.9m
竣工時定員	450名
兵　装	14cm砲単装7基×7門 8cm単装高角砲×2門 三年式機砲×2挺 (53cm)連装発射管4基×8門 五号機雷×150個

野口良作が勤務していた期間中、「球磨」が従事した主な活動等

・1937年(昭和12年)11月20日:第四艦隊附属となる。(それまでは予備艦)
・同年12月1日:第四艦隊・第三潜水戦隊に編入。日中戦争(支那事変)の拡大に伴い、青島などを拠点とする潜水戦隊の旗艦として、中国北方海域での作戦を指揮
・1938年(昭和13年)6月20日:第四艦隊・第四航空戦隊に編入され、水上機母艦「能呂」に代わって第四航空戦隊の旗艦となる。
・同年8月1日:所属が第四航空戦隊から第十三戦隊に変更され、引き続き中国方面での警備や航空支援等の任務に従事

＊16　海軍省、1938、『現役海軍特務士官及准士官名簿　昭和十三年一月一日調』

5　特務士官としての昇進

野口良作は、1938年（昭和13年）12月15日から、巡洋艦「最上」乗組みとなった。「最上」での配置、役職等は不明



軽巡洋艦「最上」（母港：呉）

要　目	内　容
就役/戦没	1935年7月28日/1944年10月25日
基準排水量	11,200トン（常備：12,200トン）
全長/幅/喫水	200.6m/20.6m/6.9m
竣工時定員	944名
兵　装	15.5センチ3連装砲塔5基×15門 12.7センチ連装高角砲4基×8門 3連装魚雷発射管4基×12門 25mm連装機銃×4基 13mm連装機銃×2基

野口良作が勤務していた期間中、「最上」が従事した主な活動等

・1938年（昭和13年）12月15日：第三予備艦
→未熟な電気溶接と無理な軽量化による船体亀裂、砲塔の旋回困難の状態。呉海軍工廠で修理に従事
・1939年（昭和14年）11月15日：特別役務艦に指定され、主砲の換装工事に着手
・1939年12月～1940年5月：呉海軍工廠にて、それまでの15.5cm3連装砲塔から20.3cm連装砲塔への換装工事

「最上」勤務中、任務、訓練等への従事はなく、呉海軍工廠に修理、改造業務にが従事

5　特務士官としての昇進

○　野口良作は、下記の証言から1939年(昭和14年)11月15日、海軍兵学校附兼教官として転出

「海軍兵学校で教官職に付いている際、海軍兵学校生徒の卒業生と連れて遠洋航海に参加した。」(次男　龍二氏談)

→遠洋航海とは、主に初級士官としての必要な資質の育成、実践的な知識・技能の修得、および国際感覚の涵養

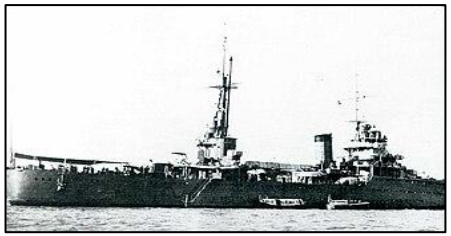
○　1941年(昭和16年)3月25日(40歳)、三男淳氏が誕生

昭和15年の実績

「野口良作」は、下表の遠洋航海に参加したものと思われる。ただし、日米関係の悪化から寄港地は、日本近海及び東シナ海のみに変更された。

実施年月	1940年(昭和15年)8月～9月
練習巡洋艦	香取(右上)、鹿島(右下)
参加した期	海軍兵学校第68期、海軍機関学校第49期、海軍経理学校第28期
行き先	日本近海、東シナ海





5　特務士官としての昇進

「野口良作」は家族とともに少なくとも1940年（昭和15年）から1941年（昭和16年）まで、広島県江田島の官舎（北第49号）に住んでいた。



○　長女 玲子氏及び三男　淳氏は、江田島で誕生し、江田島で出生届が出されている。（戸籍謄本より）

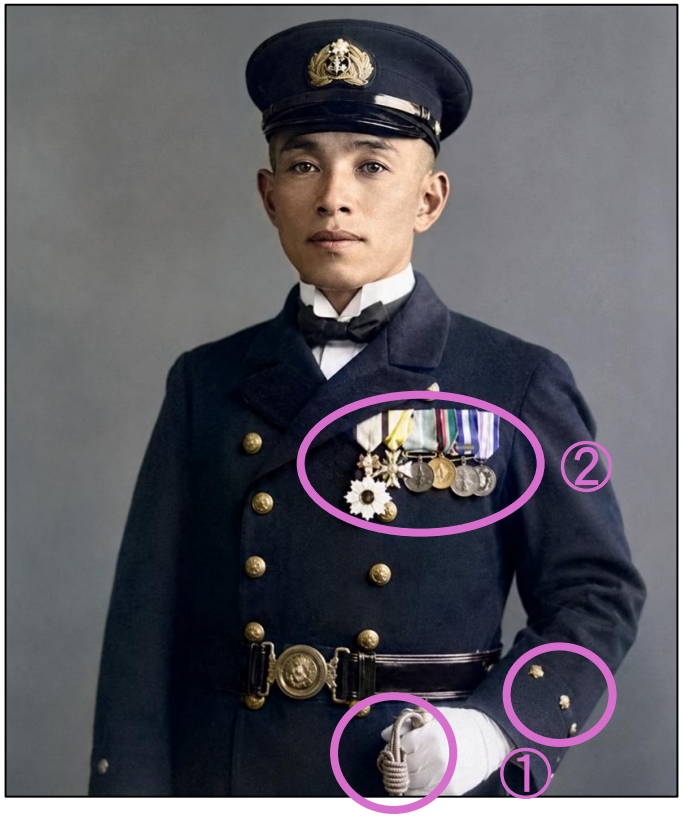
○　官舎では、米次郎氏の四女モリ氏がお手伝いに来ていた。

＊17　海軍兵学校長（1936年）、『行幸儀禮等に関する件報告。兵學第312号』、（アジア歴史資料センター所蔵）

参考資料

5　特務士官としての昇進

「野口良作」の写真（オリジナルの白黒写真を生成AIでカラー化）から、以下の事項が推定できる。



・服装：日本海軍の通常礼装
（上衣：フロックコート型）
・階級（①）：兵曹長
・袖章：3個の桜花章が見えること。ただし、将校（特務士官も含む。）を示す金線がない。
・下士官で兵曹長のみが帯剣を認められている。）
・勲章等（②）：
・勲六等単光旭日章
・勲四等瑞宝章（推定）
・大礼記念章（1928年（昭和3年）昭和天皇即位記念）
・御大典記念章、従軍記章

・撮影時期は、1934（昭和9年）からから1937年（昭和12年）特務少尉に昇任するまでの間と推定

6　巡洋艦「天龍」での任務

巡洋艦「天龍」乗組み

○　1941年（昭和16）年5月15日、特務中尉に昇任するとともに、軽巡洋艦「天龍」乗組み（役職：分隊長）となった。
→「天龍」には、兵・下士官時代に勤務して以来、2度目の勤務
→　この時期に家族も共に舞鶴（官舎）に異動したと考えられる。

○　当時の特務士官、士官の定期人事異動は、4月1日付であり、夏期（7、8月）又は秋期（10月）において、昇任、艦隊編成替えなどで人事異動があった。

○　1941年（昭和16年）8月15日海軍は、出師準備作業の第二着作業の一部を発動した。すでに1940年（昭和15年）11月15日、海軍は出師準備作業の第一着作業が発令し、対米開戦の軍戦備を推進されており、野口良作の人事も、この水師準備による影響を受けた可能性がある。

出師準備とは

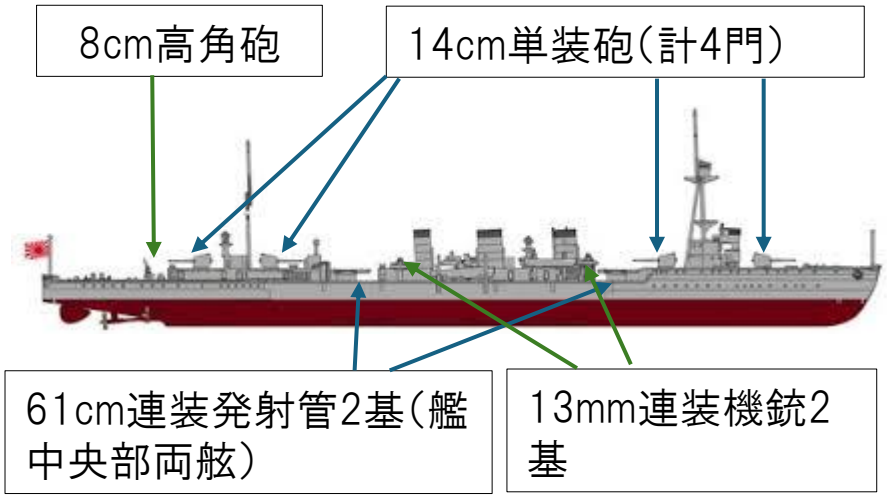
○　国軍を平時の態勢より戦時の態勢に移し、且戦時中之を活動せしむるに要する準備作業(*14)

○　軍需品整備、艦艇建造（マル急計画など）、特設艦船の準備、人員動員、港湾・通信整備など、多岐にわたる大規模な準備作業　→　各艦は、所要の弾薬、燃料を搭載するだけでなく、人員の異動、補充も実施

6　巡洋艦「天龍」での任務

巡洋艦「天龍」の概要

艦　種	軽巡洋艦（2等巡洋艦）
造船所	横須賀海軍工廠
竣　工	1919年(大正7年)11月20日
所　属	第4艦隊第18戦隊(昭和16年12月戦時編制改定)
母　港	舞鶴(昭和16年当時)



【主要性能】

項　目	数値／内容
基準排水量	約3,500トン
全長/全幅	142.7m／12.3m
主機	オール・ギヤード・タービン(高低圧)3基3軸
最大速力	約34ノット
航続距離	5,000海里（14ノット時）
乗員	約330名（戦時期）

大東亜戦争における戦歴

1941年12月　ウエーク島攻略作戦
1942年1月～2月　ラバウル・カビエンの攻略作戦
3月　ラエ．サラモア攻略作戦
4月　ポートモレスビー攻略作戦
8月　第1次ソロモン海戦
8月～9月　ラビ攻略作戦
10月2日　ラバウルで被弾
11月　第3次ソロモン海戦
12月18日　マダン上陸作戦で被雷、沈没

6　巡洋艦「天龍」での任務

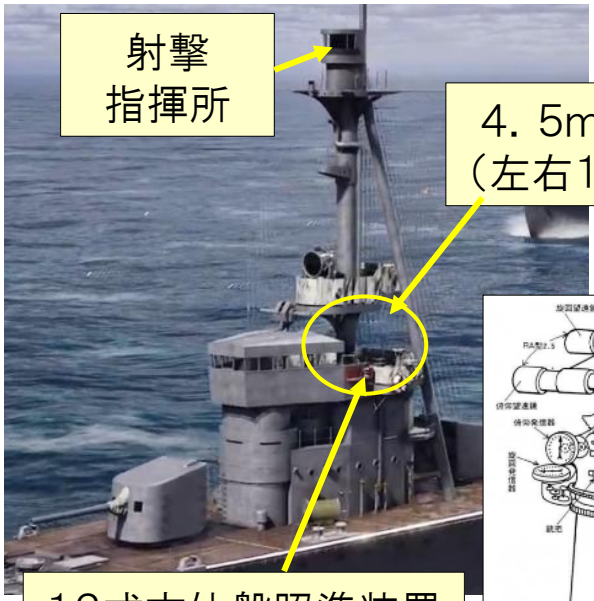
「野口良作」の配置

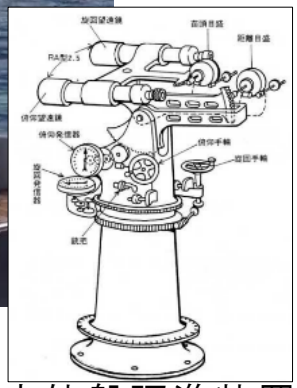
○　主砲台長又は掌砲長であった可能性がある。
→　昭和17年10月2日の「天龍」の主要被害「死傷」で「准士官以上3名」の内訳に「主砲台長」が記載(*18)
→　当時の巡洋艦「天龍」機械分隊長 三浦大尉は、同被害に関して「砲弾の破片が頭部を貫通して即死した掌砲長、・・・」と証言している。(*19)
○　戦闘部署(配置)において、「野口良作」は、右下図の射撃指揮所又は艦橋内左右いずれかにおいて、主に主砲(4門)の射撃指揮に従事していたと思われる。

【砲術科主要配置】

役　職	階級等	主な職務
砲術長	兵科大尉／少佐	全砲員の戦闘指揮、射撃統制官
砲術士補	大尉／中尉	射撃準備、照準指揮、砲側訓練の統括
掌砲長	特務中尉又は兵曹長	各砲塔・砲側の統率、射撃号令伝達、弾薬装填指揮
主砲台長	特務中尉～兵曹長	各砲塔・砲座の直接指揮

巡洋艦「天龍」は、就役時から13式方位盤照準装置が装備され、14cm砲4門を一元的に射撃管制していた。(*20)

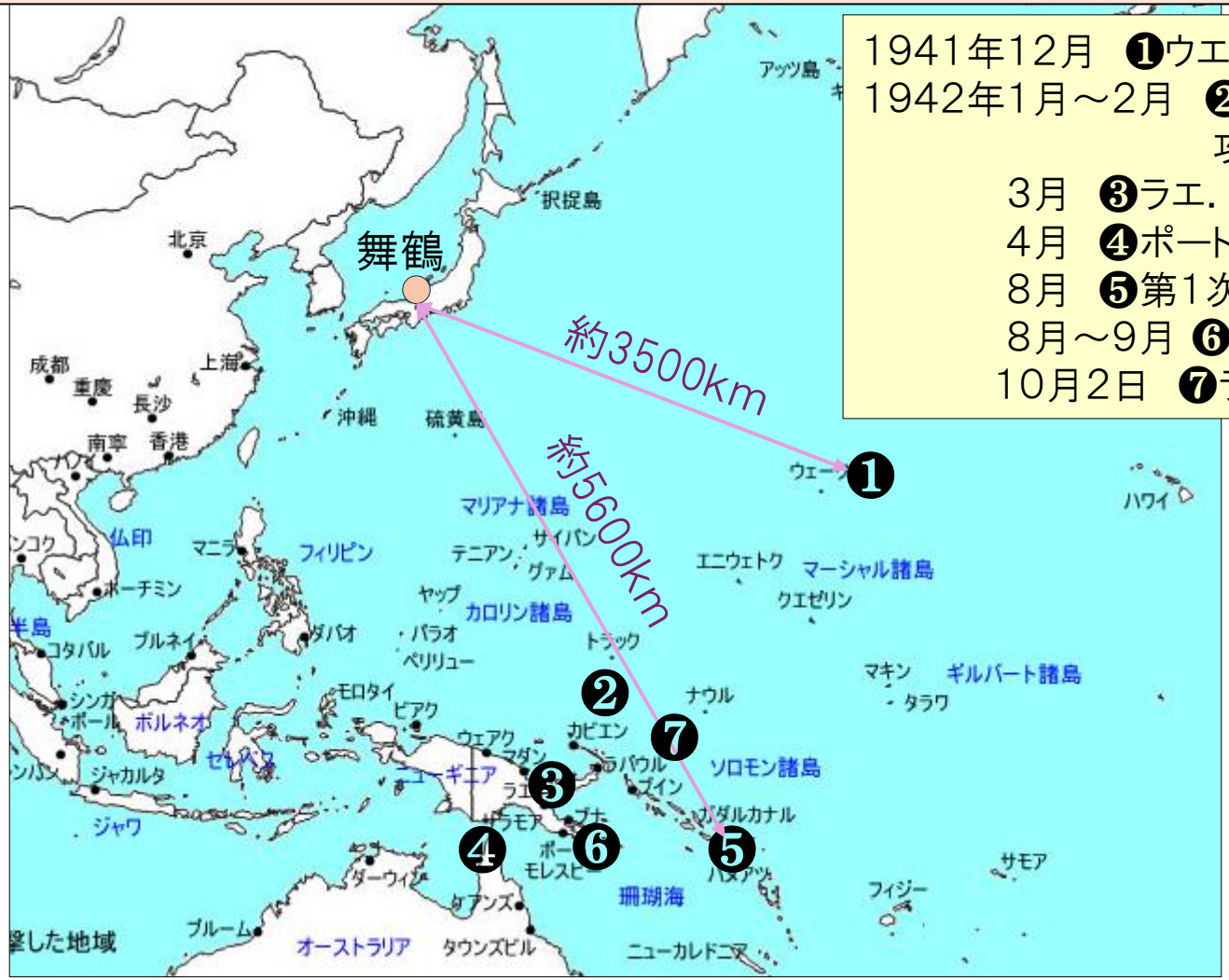



方位盤照準装置

＊18　『昭和17年10月1日～昭和17年10月31日第18戦隊戦時日誌戦闘詳報』
＊19　松田源吾他(2017年)、『軽洋海戦史』、潮書房光人社、p138
＊20　高須廣一、『日本海軍のFCS、その技術的回想(世界の艦船1995年3月号)』、p97、p101

6　巡洋艦「天龍」での任務

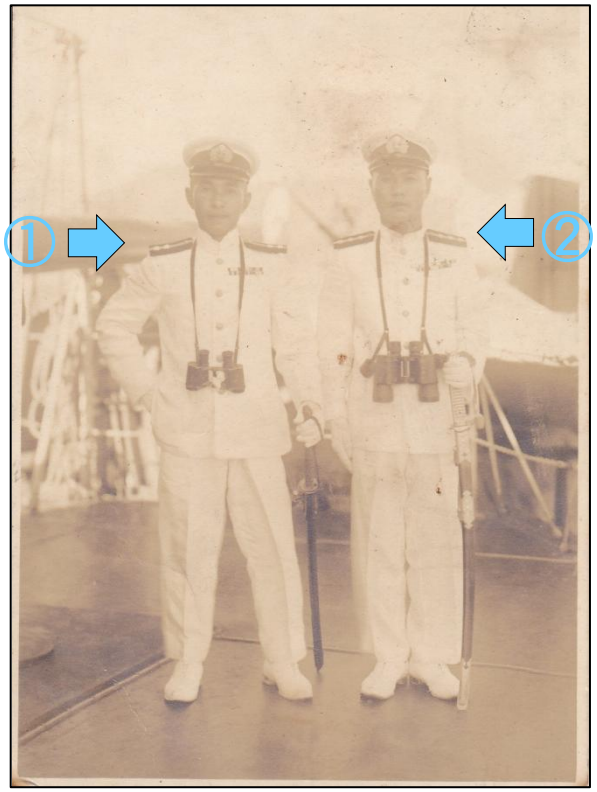
大東亜戦争開始から戦死されるまで、「野口良作」が従事した主な作戦の場所は、以下のとおりである。昭和17年5月～6月舞鶴で修理している他は、常に作戦に従事していた。



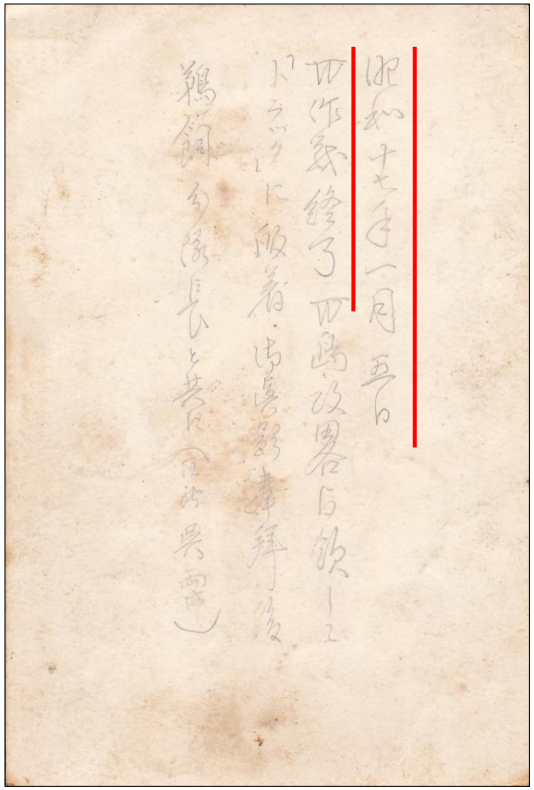
1941年12月　❶ウエーク島攻略作戦
1942年1月～2月　❷ラバウル・カビエンの攻略作戦
3月　❸ラエ．サラモア攻略作戦
4月　❹ポートモレスビー攻略作戦
8月　❺第1次ソロモン海戦
8月～9月　❻ラビ攻略作戦
10月2日　❼ラバウルで被弾

6　巡洋艦「天龍」での任務

1942年(昭和17年)1月5日トラック泊地の巡洋艦「天龍」艦上で撮影された「野口良作」の貴重な写真である。
→　ウェーク島攻略に苦戦したことから、束の間の休息を取ったと思われる。



左：野口良作特務中尉
右：鵜飼 大尉(分隊長)



写真の裏面に説明書き

○　昭和17年1月3日、第18戦隊は、W(ウェーク島)攻略作戦を終えて、トラック泊地に入港(*21)
○　写真から「野口良作」の階級章から①「中尉」、鵜飼部隊長は、②「大尉」であることが分かる。
○　同年1月20日ラバウル・カビエンの攻略作戦のため、第18戦隊は出港(*22)

＊21　防衛庁防衛研究所戦史室編(1975年)、『戦史叢書第38巻　中部太平洋方面海軍作戦＜1＞昭和十七年五月まで』、朝雲新聞社、p320
＊22　防衛庁防衛研究所戦史室編(1975年)、『戦史叢書第49巻　南東方面海軍作戦＜1＞ガ島奪回作戦開始まで、朝雲新聞社、p48、p49及びp61

参考資料

６　巡洋艦「天龍」での任務

残されている「野口良作」の写真で最後のもの（特に海軍士官として撮影され、現存する写真はこの１枚のみ）を生成AIで補正等を試みた。



【オリジナルの白黒写真】



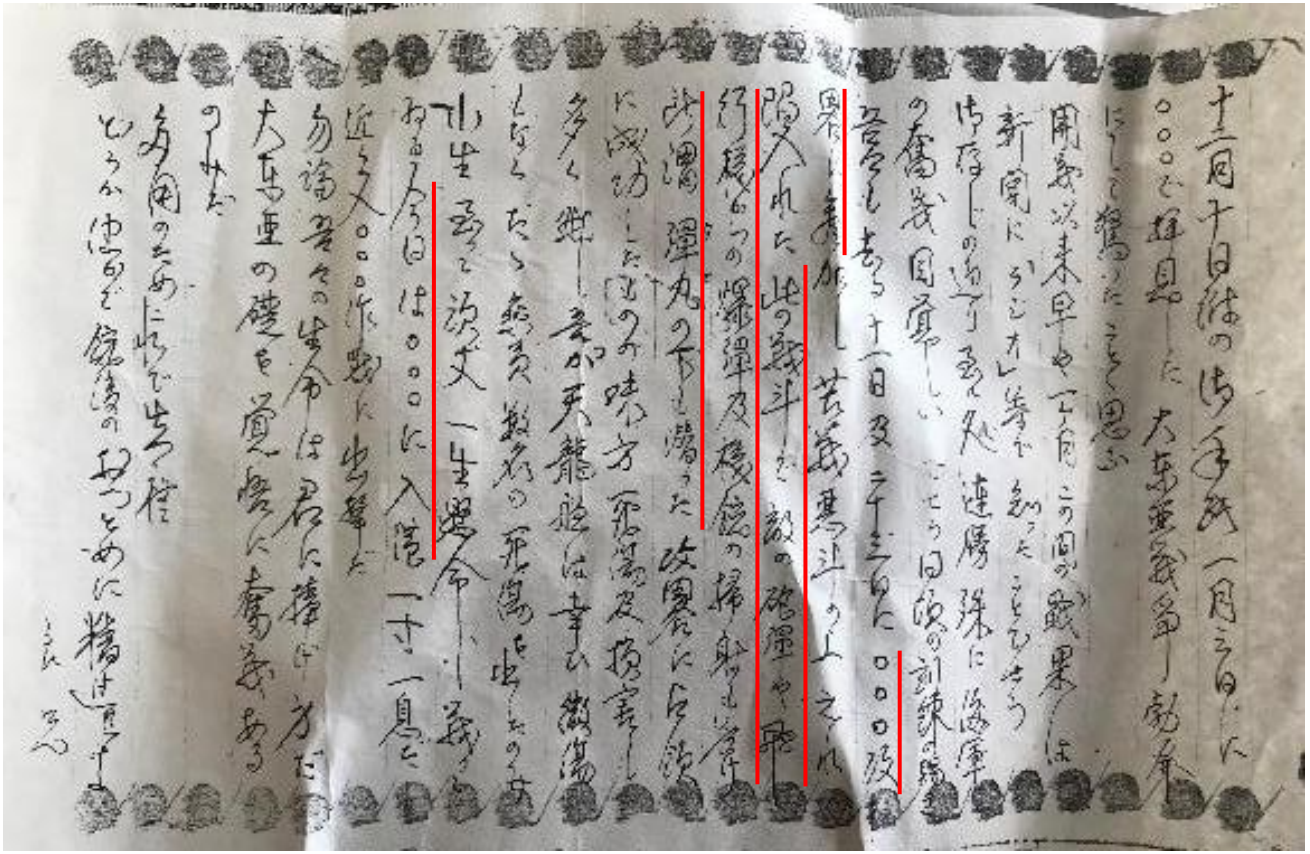
【補正及びカラー化】
オリジナルと比較すると、「野口良作」の表情（特に目の部分）が異なる処理がされてしまう。



【補正及びカラー化】
オリジナルから「野口良作」の部分だけを取り出し、補正及びカラー化すると忠実に再現される。

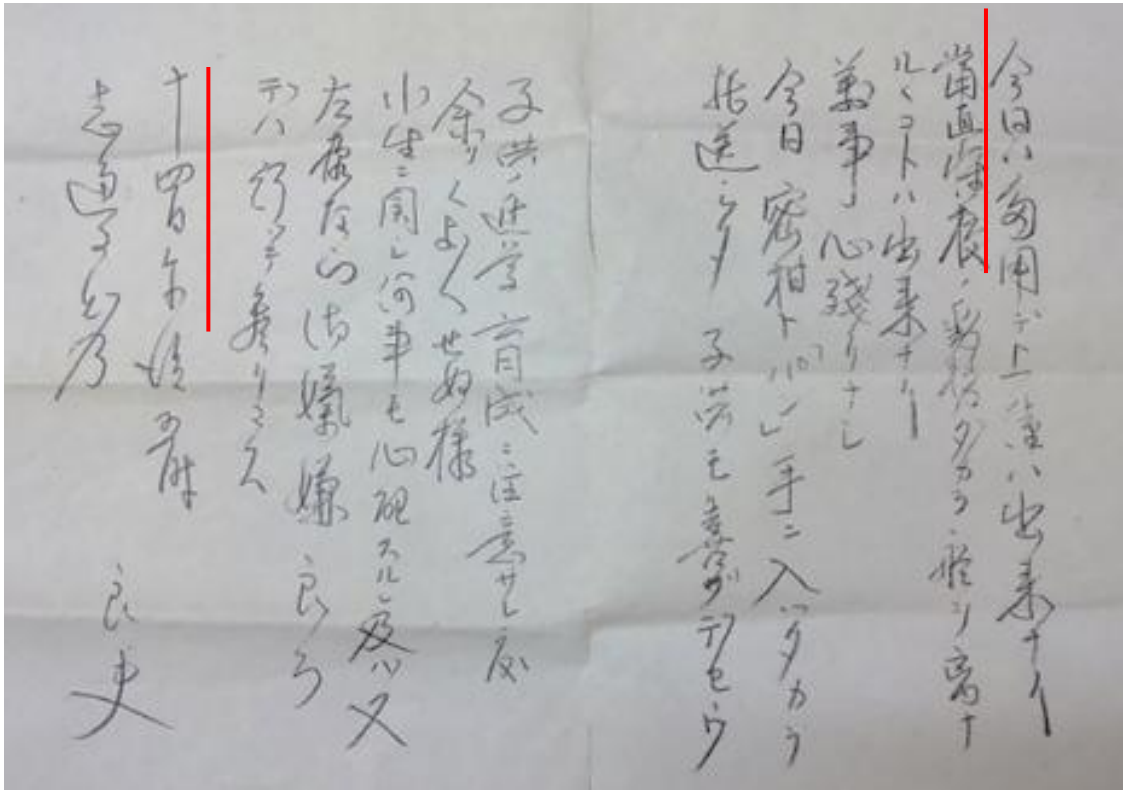
6　巡洋艦「天龍」での任務

1942年(昭和17年)1月5日トラック泊地に入港後、知人宛に書かれた手紙と思われる。
→ ウェーク島攻略作戦において、巡洋艦「天龍」は、米軍の陸上砲台からの砲撃、米航空機(F4Fワイルドキャット戦闘機)から、至近弾、機銃掃射を受け、数名の死傷者が出た旨が記載されている。



6　巡洋艦「天龍」での任務

○　1942年(昭和17年)5月23日巡洋艦「天龍」は、舞鶴に入港した。そして、1941年(昭和17年)6月15日巡洋艦「天龍」は、舞鶴を出港した。(*23)
○　下の手紙は、6月14日書かれたものであり、当日「野口良作」は当直将校のため、帰宅できなかった。



封筒内に手紙は1枚。家族には「パン」とともに官舎に届けられた。

入港中の巡洋艦「天龍」

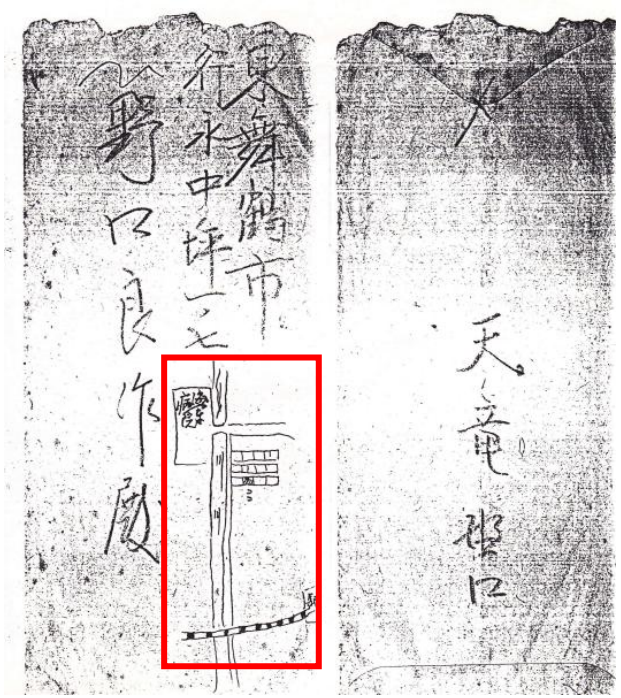
・6月3日～6月13日までの間、海軍工廠の第3船渠(ドライドック)に入渠
・船体の整備、修理に加え、25ミリ連装機銃を2基の増備、舷外電路装備、探照灯の移設や換装(*24)
・この間、乗員には休暇が出されたものと推定

手紙には、子供の育成に関すること、最後に「左様なら ご機嫌良う では行って参ります」旨、別れの挨拶が記されている。

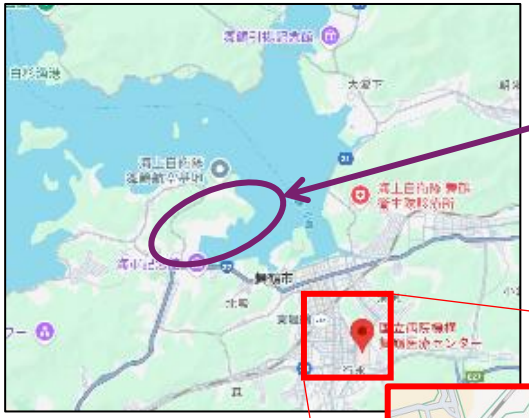
＊23 『昭和17年5月1日～昭和17年7月31日　第18戦隊戦時日誌戦闘詳報』
＊24 歴史群像編集部(2005年)『帝国海軍真実の艦艇史 (2) (歴史群像 太平洋戦史シリーズ Vol. 51)』、学習研究社、p94～p96

6　巡洋艦「天龍」での任務

1942年(昭和17年)6月14日、「野口良作」が前スライドにある最後の手紙を託す者に対し、手紙の封筒の表に、官舎の場所を地図で明記していた。その官舎の場所を特定した。現在は、海上自衛隊の官舎ではなく、住宅街となっている。



封筒(表)に官舎の場所(赤枠)が記されている。



東舞鶴全域

舞鶴の海軍工廠(第3船渠を含む。)。現在は、JMU(ジャパン・マリン・ユナイテッド)造船所があり、主に海自艦船の修理、整備を受注している。



参考資料

6　巡洋艦「天龍」での任務

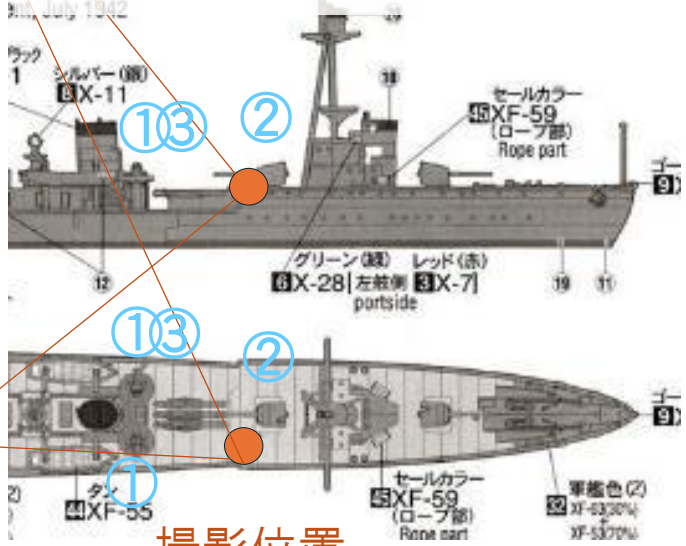
1942年(昭和17年)6月13日、第18戦隊司令官が、海軍少将　丸茂邦則から海軍少将　松山光治に交代した(*25)。下の写真は、巡洋艦「天龍」艦上で撮影されたものである。③(警戒員)が写っていることから、同年6月23日トラック泊地の入港後から7月20日ニューギニア島ブナ攻略作戦(ポートモレスビー攻略作戦の一つ)の間に、トラック泊地で撮影されたと推定する。

なお、1941年第18戦隊編成時から、巡洋艦「天龍」は第18戦隊旗艦を担った。



前列　松山光治少将、後列左端 首席参謀
篠原多磨夫中佐(推定)ほか参謀2名

① 25ミリ連装機銃(開戦当初から装備されていた13ミリ連装機銃から換装されている。)
② 2番砲(14cm砲)の砲身
③ 双眼鏡をもつ警戒員



撮影位置

＊25『昭和17年5月1日～昭和17年7月31日　第18戦隊戦時日誌戦闘詳報』

参考資料

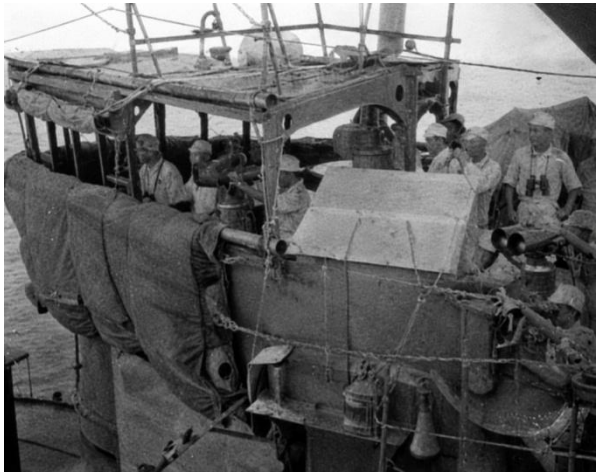
6　巡洋艦「天龍」での任務

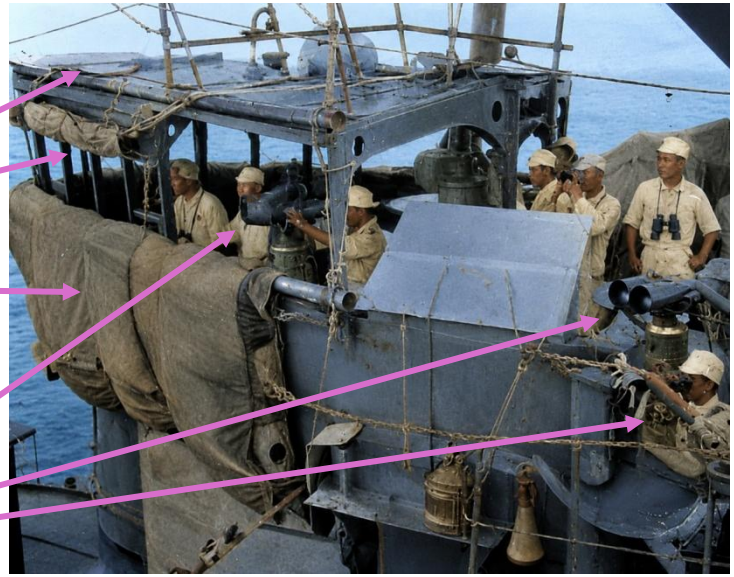
これは昭和17年6月輸送船から「天龍」の艦橋付近を撮影したと推定される写真である。ただし、検閲制度により公表が不許可となった（理由不明）。生成AIを活用して写真を鮮明化させることで、「天龍」艦橋及び艦橋配置員の動作、表情がよく確認できるようになった。



【オリジナル画像】

・文字の除去
・鮮明化





カラー化

【カラー化により判明すること】

・艦橋の天井が薄くて簡素
・艦橋に窓ガラスなし。
・艦橋周囲にマントレット
　敵の砲弾や爆弾の炸裂時に飛び散る破片（弾片）から乗員や艦橋の重要施設を防護
・見張り員が左舷に3カ所

7　戦死とその後について

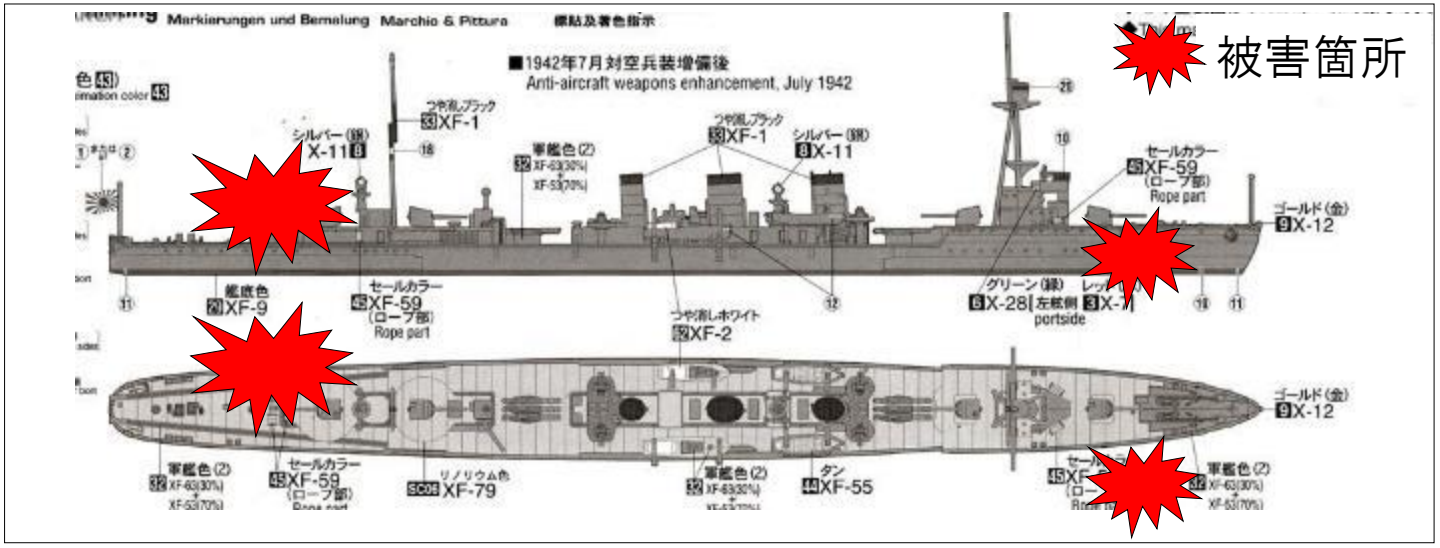
戦死時の状況

○　1942年(昭和17年)10月2日0340から0410にかけて、米軍機(B－17×3機)が、ラバウルに来襲(*26)

○　0335、巡洋艦「天龍」の後甲板左舷に命中弾1発、前右舷側に至近弾を受け、戦闘航海が不能となった。(*25)(被害箇所は、下図のとおり。)

→　**「野口良作」は、後部におり、直撃を受け身体が吹っ飛び、戦死(即死と思われる。)**。また、砲(4番砲塔又は8cm高角砲)にへばりついていた靴に「野口」名があり、当該部位に係る遺骨がいくつか帰ってきた。

○　巡洋艦「天龍」の死傷者は、戦死22名(准士官以上3名、下士官・兵19名)、重傷15名(准士官以上1名、下士官・兵14名)、軽傷11名(すべて下士官・兵)



＊26　研究所戦史室編(1975年)、『戦史叢書第83巻　南東方面海軍作戦＜2＞ガ島撤収まで』、朝雲新聞社

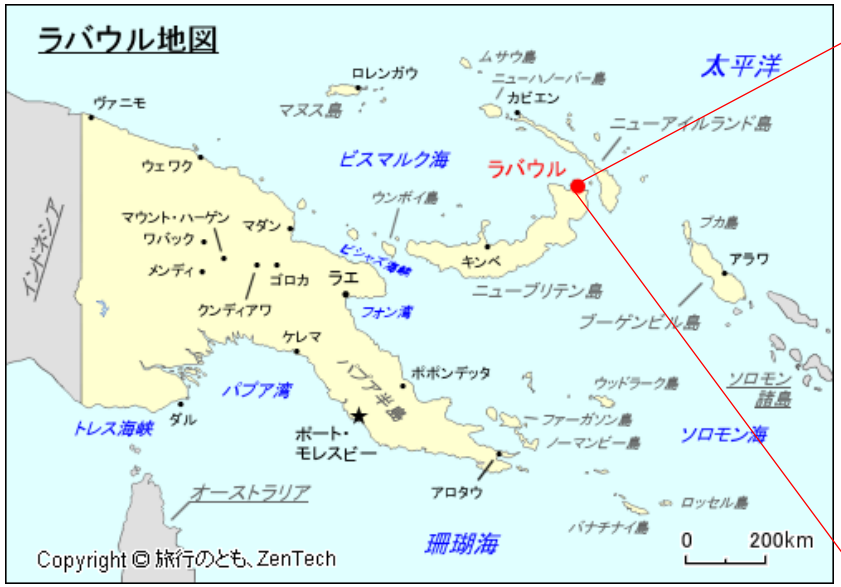
＊25　昭和17年9月1日～昭和17年12月24日　第18戦隊戦時日誌戦闘詳報

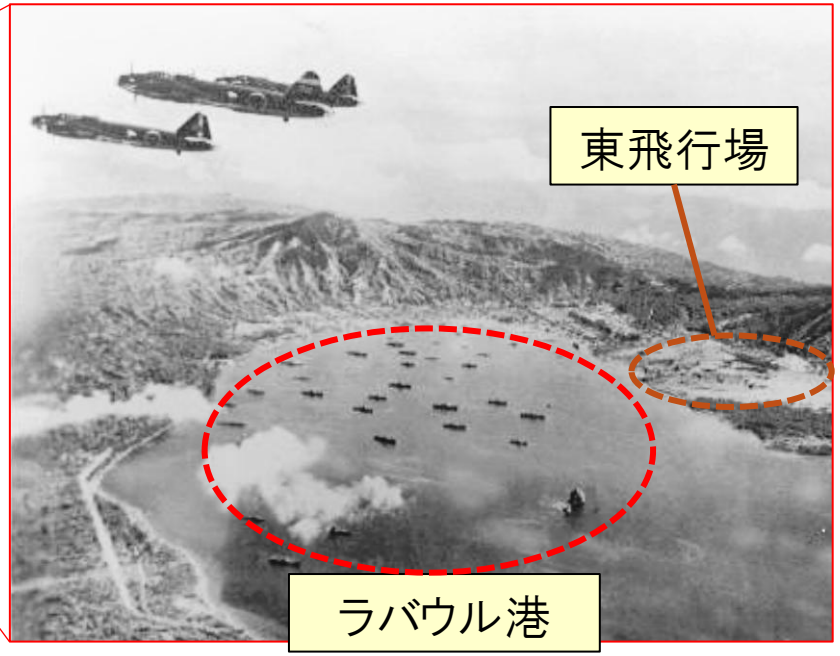
7　戦死とその後について

戦死時の状況

○　当時の巡洋艦「天龍」機械分隊長 三浦大尉の証言によると、「戦死者は遺品となるものを残し、ラバウルの東飛行場の隅に穴を掘り、油をかけて荼毘に付したが、なぜか、なかなか燃えなくて困った。」(*19)

→　この証言通り、「野口良作」の遺品も、四角い木箱に舞鶴の遺族に届けられた。戦後もしばらくの間、この木箱が自宅にあったことを三男 淳氏は記憶している。





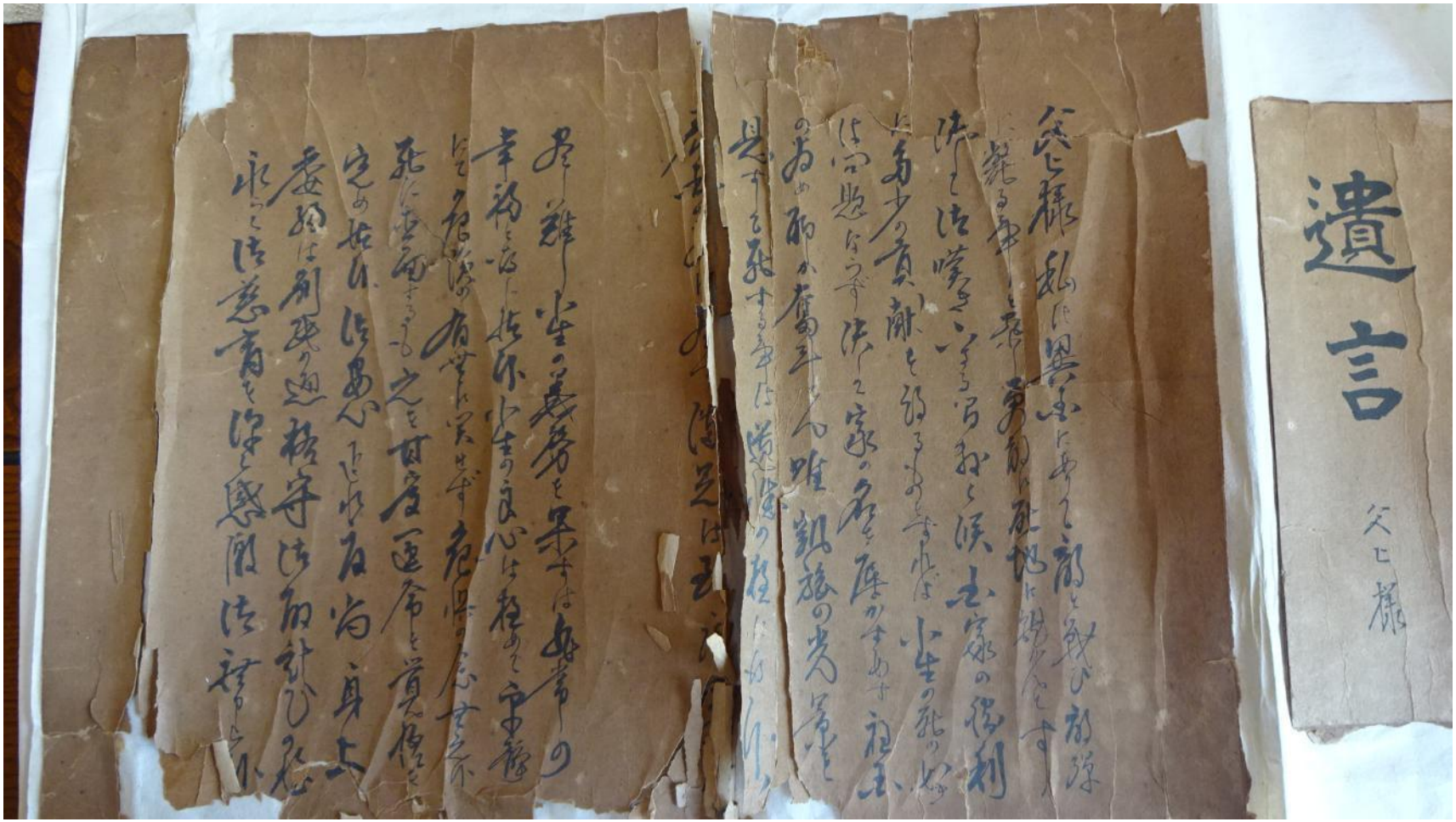
巡洋艦「天龍」は、ラバウル港内のいずれかで停泊(錨泊)中、爆撃を受けた。

＊19　松田源吾他(2017年)、前掲書、p138－139

7　戦死とその後について

父宛の遺書

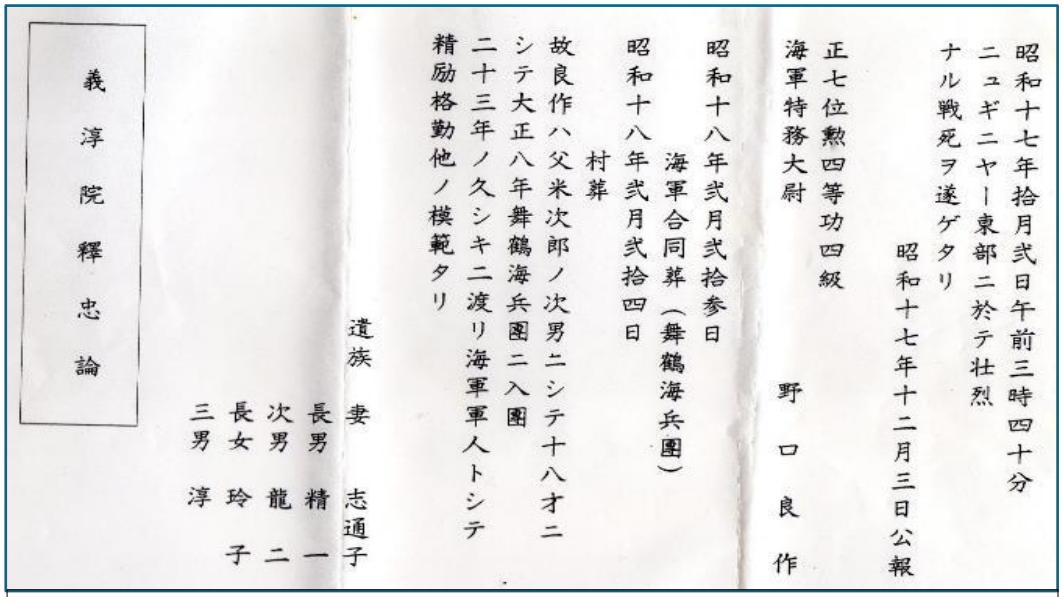
○ 「野口良作」が書いた父 米次郎氏宛の遺書が現存する（京子氏宅で保管）。いつ、どこで書かれたものかは不明



7　戦死とその後について

「野口良作」の葬儀等

○　1942年（昭和17年）12月3日「野口良作」の戦死が公表された。
○　1943年（昭和18年）2月23日、舞鶴鎮守府で海軍合同葬、翌24日村葬が挙行された。



昭和十七年拾月弐日午前三時四十分
ニューギニヤー東部ニ於テ壮烈
ナル戦死ヲ遂ゲタリ
昭和十七年十二月三日公報

正七位勲四等功四級
海軍特務大尉
野口良作

昭和十八年弐月弐拾参日
海軍合同葬（舞鶴海兵團）
昭和十八年弐月弐拾四日
村葬

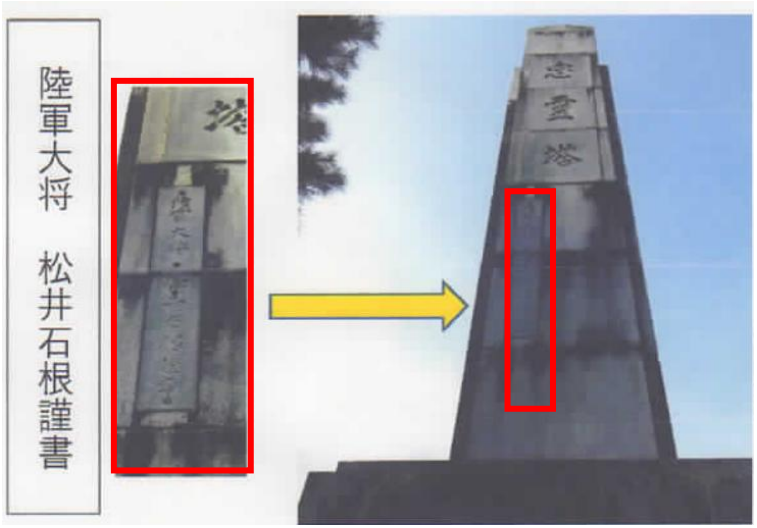
故良作ハ父米次郎ノ次男ニシテ十八才ニシテ大正八年舞鶴海兵團ニ入團二十三年ノ久シキニ渡リ海軍軍人トシテ精励格勤他ノ模範タリ

遺族　妻　志通子
長男　精一
次男　龍二
長女　玲子
三男　淳

義淳院釋忠論

【次男　龍二氏談】
・この海軍合同葬の対象者が数百名であり、驚いた。大将（舞鶴鎮守府長官（中将　新見政一）と推定）が参加し、とても寒い日だった。
・舞鶴から富山へ汽車で移動中、悪天候（降雪）のため、金沢駅で動けなくなった。その夜、寝るために配布された毛布が重くて眠れなかった。

陸軍大将　松井石根謹書





2月24日村葬では、陸軍大将松井石根が参列された。松井大将が参列された経緯等は不明（*26）

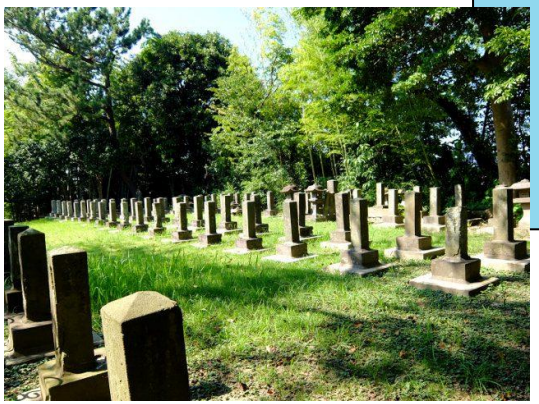
＊26　米田幹雄氏（2018年7月）『近代戦争史と入善町、椚山の戦没者の状況』

7　戦死とその後について

「野口良作」の墓地

○　現在、「野口良作」の墓は横須賀市にある馬門山海軍墓地内にある。
○　馬門山海軍墓地は、1882年（明治15年）、海軍省により戦死もしくは殉職した軍人のために設けられたものである。現在、毎年5月墓前祭が行われている。





明治時代の墓（墓石には指名の他に出身地と「平民」等が記されている。）



墓前際の風景（海上自衛隊が支援）



野口家之墓（野口良作氏、妻　志通子氏、長男 精一氏が眠る。）

7　戦死とその後について

教育参考館

1936年（昭和11年）、広島県江田島にある「教育参考館」には、明治以来の卒業生で戦没した旧海軍士官・兵の氏名が刻まれた大理石製の銘板が展示されている。（下右の写真）当該銘板に、選修学生欄に「野口良作」の名前が刻まれている。現在、当該展示の部屋は、一般見学者には開放しておらず、親族等関係者等のみが入室できる。



教育参考館。昭和11年、海軍関係者や財界からの寄付によって建てられたギリシャ神殿風の鉄筋コンクリート造2階建ての建物。現在は海上自衛隊員の教育の場としても使用



背景にある白色が大理石製の銘板。1987年（昭和62年）、作成者（右端：当時12歳）は、父（三男淳氏（左から2人目）、母（光代）、作成者の弟（洋）とともに江田島を観光し、当該展示室を見学した。

参考資料

7　戦死とその後について

松井大将が村葬に参列された理由の考察

松井大将と椚山等との関係

松井大将は、愛知県出身。それまでの陸軍経歴等において、富山県及び入善町、椚山と関連性は見当たらない。



陸軍大将　松井石根

1943年における松井大将の状況

○　1938年から予備役
○　「大亜細亜協会」会頭を努め、アジア主義運動を展開し、国内各所での講演活動を行っていた。
○　「思想国防協会」会長を努め、日米開戦の意義や東南アジア占領地における興亜思想の普及に尽力していた。
○　戦争の記念行事、戦没者追悼、大東亜共栄圏推進団体などへの関与も続ける。

戦没者の追悼に際しての当時の慣行

○　戦没将兵の村葬・町葬・組合葬が行われる。
○　軍・政府高官の代表が名誉参列することが通例化していた。
　→ 戦局が厳しくなると、国民への戦意高揚と“遺族への慰問の姿勢”が重視
○　陸軍・海軍の著名将官が招かれることにより、国からの追悼の意志が表明された。
　→「野口良作」（戦没者）に対する名誉と忠義の評価が背景にあり。

【結論】松井大将の参列は、戦没者追悼における国家・軍の象徴として、参列されたものと思料

8　結語・人物評価

エピソード等

「野口良作」に関し、見聞き等により残されている逸話は、以下のとおりである。

○　字が上手い。戦後まで椚山尋常小学校の校内で、習字が掲示されていたことは、p5のとおり。

→　残されている手紙、掛け軸（右図参照）からも達筆である。

○　射的が上手い。お祭りの射的で、次々と当てたため、店主から「これ以上は止めてほしい」旨、哀願された。

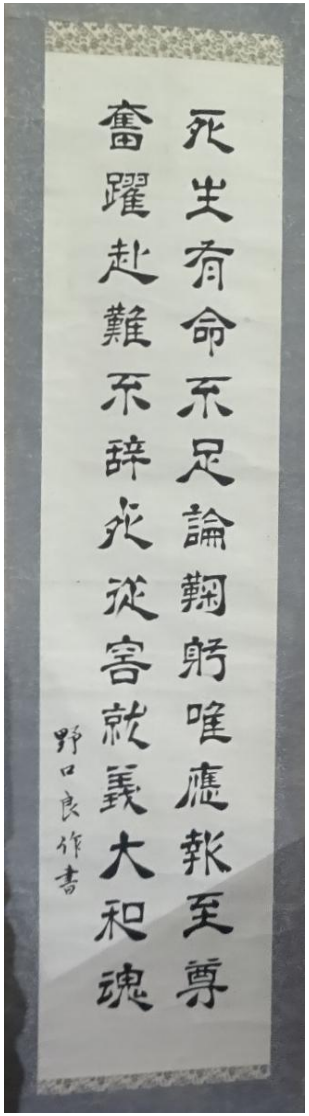
○　子息の将来に関し、長男は「官吏」、次男は「外交官」、三男は「軍人」と公言してした。

→　三男　淳氏が誕生した日は、海軍兵学校第69期生の卒業式（久邇宮朝融王殿下、及川海相等も臨席）が挙行された日であった。そのため、「この子は、軍人」と言われたものと思料する。

→　「野口良作」の妻 志通子氏によると、三男　淳氏の名前は、「野口良作」の教え子の中で、特に優秀な者の名前から取られたものであった。「あなたは名前負けだよ。」と言われた。（三男 淳氏談）(*27)

○　子供の教育、躾に対し、厳しい面があった。勉強を怠ると、風呂場で水を浴びせられた。戦後、三男　淳氏は、妻 志通子氏から「お父さんがいたら、大変だよ」と言われた。

○　「野口良作」が街を歩いていると、通り過ぎる海軍軍人が敬礼してきた。



＊27　海軍兵学校第69期卒業生名簿で、「森田　淳」が確認できる。大東亜戦争で、伊号第174号潜水艦 航海長の際、戦死（階級：少佐（戦死後？））

8　結語・人物評価

エピソード等（続き）

○　自身が戦死したときのことを考え、国債（現在の価値で約4000万円（要確認））を購入、保有していた。しかし、敗戦により国債は価値を失ってしまった。
○　「父が残してくれたものは、頭脳と健康」（次男　龍二氏談(*28)）
→　次男　龍二氏（93歳）、三男　淳氏（85歳）も未だ健康である。
○　大東亜戦争が始まる前（江田島に住んでいるとき、1941年（昭和16年）と推定）、汽船で家族で呉から「琴平旅行」に行った。次男　龍二氏は、汽船では一家が莚を引いて座り、通り過ぎる瀬戸内を眺めたこと、また、夜も賑わっている街を見たことがなかったことから琴平をとても記憶に残っている。
→　「一生に一度はこんぴら参り」の信仰が庶民に根付いており、船乗りや商売人を中心に、全国から参拝に訪れ、賑わいを見せていた。
→　主祭神である大物主神が海上守護の神として厚く信仰され、航海安全、豊漁、五穀豊穣、商売繁盛、病気平癒など、幅広いご利益を求めて参拝
○　戦死後、遺品が木箱で送られてきた。木箱には短剣、日記などいろいろなものが入っていた。
○　野口良作は戦死する前、すでに特務大尉に昇進することが決まっていた。（次男　龍二氏談）
○　戦死したことが通知されると、妻　志通子氏は、子供たちを整列させ、「野口良作」が戦死されたことに加え、これから勉強をしっかりするように言った。

*28　2026年（令和8年1月4日次男　龍二氏のご自宅で話を伺った。以下、第9項まで次男　龍二氏に係る内容は同日伺ったものである。

９　残された遺族について

○　舞鶴の官舎にいるとき、椚山から舞鶴に訪れる家族等を官舎に泊めてあげることが多々あった。これは海軍艦艇の舞鶴入港に合わせ、家族が面会のため、舞鶴に来るものの、ホテル等宿泊施設満室であったためである。

○　戦時中、三男　淳氏は、舞鶴に空襲が遭った際、防空壕に逃げ込んだことと、航空機の音などを記憶しており、「なぜ、このようなことをするのか」と思っていたと回想している。

○　戦後、三男 淳氏は、舞鶴港から東舞鶴駅まで歩いていく大勢の引き揚げ者を目撃している。妻　志津子氏は、引き揚げ者を支援する業務に従事しているとき、病気に感染して、舞鶴鎮守府病院に入院した。その際、妻　志津子氏の妹 加藤ミツ子氏が舞鶴の官舎で子供たちの面倒を見てくれた。また、舞鶴鎮守府病院の医官が、次男 龍二氏が中等学校に行けるよう面倒を見てくれた。

○　1946年（昭和21年）、一家は、舞鶴官舎を出て、横須賀市久郷に異動した。横須賀での住宅はひどく、トイレは外にあり、水道もなかった。

○　保有していた国債の価値はなく恩給も泊まったため、一家は困窮した。長男 精一氏と次男 龍二氏は、家を建てることと、長女 玲子氏と三男 淳氏が高校に行けるよう共に働くことにした。

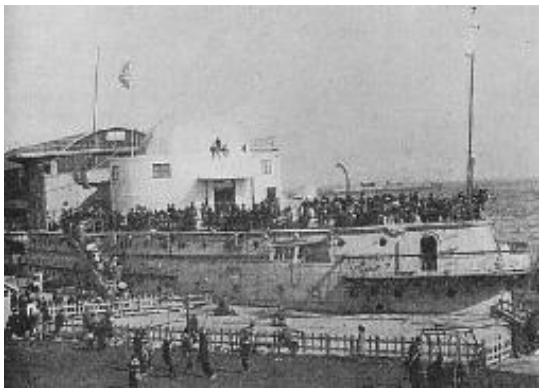
○　妻 志津子氏は、ミシンで生計を立てた。ミシンは、「野口良作」が洋行した際に購入してきたものであり、当時は日本で手に入りにくいものだった。

○　1953年（昭和28年）、軍人恩給(*29)が復活するまで、「野口良作」の保有していたものを売って生活した。

*29 軍人恩給は、旧日本軍の軍人・軍属が一定期間の勤務、または公務上の負傷・死亡により退職した場合に、本人やその遺族へ支給される国家補償を基本とする年金制度

９　残された遺族について

○　1959年（昭和35年）、荒廃した戦艦三笠の復興工事が開始に際し、元海軍関係者から寄付金を募った。（*30）その際、野口家にも求められ、妻 志通子氏はやむを得ず寄付に応じた。その際、「戦後、困窮時、何　も支援してくれなかったのに・・・」と憤懣やる方なく語っていることを三男 淳氏は記憶している。
→　戦後、相当に苦しい生活を強いられていた証左



戦後、米軍に接収され、ダンスホールなどに使用され荒廃した「三笠」

○　三男 淳氏が小学生の頃、担任教師による家庭訪問があった。担当教師は、女性であり、戦争未亡人であった。玄関で泣いていることを目撃した。
　当時、クラスメイトの中には、父親を戦争で亡くしている同級生が少なくなかった。また、貧乏で弁当をもってこれないもの、音楽の授業で楽器を購入できないものがいたことを三男 淳氏が回想している。

○　長男 精一氏は、大学に進学したかったものの、叶わず、国税局で働いた。以後、86歳まで税理士として働いた。

○　次男　龍二氏は、食糧難の際、藤沢方面まで足を伸ばし、お百姓から食料をもらうことをお願いした。当時、それに大きな抵抗があった。お百姓が難色を示すこともあったため、横須賀で釣りし、お百姓に魚をもっていくと、食料と物々交換してくれた。

*30 寄付には、米海軍減衰チェスター・ニミッツも含まれていた。1961年（昭和36年）5月27日日露戦争の象徴ともいえる“日本海海戦”の勝利記念日（戦前の海軍記念日）に合わせて復元記念式が行われ、記念艦三笠として蘇った。

９　残された遺族について

○　次男　龍二氏は中学1年時、英語を読めるまでのレベルになっていた。ただし、リスニングや会話ができなかったことから、市役所で教会の張り紙を見つけて申し込んだ。そして、週に1回教会に通い、宣教師の下でリスニング等英語力を身につけた。

○　次男　龍二氏は、英語ができることから、進駐軍の下請け会社で通訳として採用された。当時の公務員給料の3倍はもらっていた。

○　次男　龍二氏は、三男　淳氏が高校まで進学る目処が立ったため、慶応大学の通信制を始めた。そして、優秀な成績であったため、同大学の先生から見込まれ、3年生から通信制から正規の大学（本科生）に移行した。いずれも成績は優秀であり、龍二氏は、常にプライドをもって勉学に励んでいた。卒業後、ホテル「ニューオークラ」で働き、そして、1964年（昭和39年）、オリンピックのときには「ニューオータニ」に秘書として採用された。当時のオーナーは富山県出身者であった。



右：次男　龍二氏
左：三男　淳氏
（2026年1月撮影）

作成者 後書き

調査の経緯

○　以前より祖父である「野口良作」が、海軍でどのような役割を担っていたのか、興味を持っていた。
○　**2025年12月、中日新聞Webで、米田幹雄氏の『昭和史セミナー「昭和十七年の戦没者を考える」』セミナーに関する記事を偶然閲覧した。**すぐに「入善まちなか交流施設うるおい館」に連絡し、、米田幹雄氏とコンタクトを取ることができた。
○　米田幹雄氏から、自身が調査した資料を送付していただき、また、電話でも話を伺うことができた。その際、**米田氏から先人のことを資料として残すことの重要性をお聞きし、感銘を受けた。**そのことから、年末年始休暇を利用して、「野口良作」に関する調査を行おうと決心した。

調査の実施

○　**「野口良作」に関する資料は、極めて少なかった。**また、「野口良作」本人と接していた者の**多くが他界しており、証言を得ることがほとんどできていない。**
○　昨今、貴重でかつ大量の戦史資料（1次・2次資料）がデジタル化され、国会図書館デジタルコレクション、防衛研究所のHPで公開されている。同HPには検索機能があるものの、「野口良作」又は関連で出てくる資料はほぼ見当たらなかった。
○　防衛研究所、横須賀市中央図書館などにも足を運び、資料を漁ったものの、「野口良作」が海軍に入団してから、巡洋艦「天龍」に乗り組まれるまでの情報は得られなかった。また、「野口良作」に関する検索及び調査自体の方法の助言に、生成AIも活用した。
○　したがって、本調査では、断片的に残されている資料を軸に調査した。また、経歴等は、当時の海軍軍人が歩む標準的なものを参考にして推察した。推察する事項が多く占めたものの、それを裏付ける根拠に乏しいことが弱点である。

今後の方針

現存されている方に証言を得られるよう努めるとともに資料の更新を続けていく。

主要参考・引用文献一覧表

・太平洋戦争研究会（2003年）、『江田島海軍教育』、新人物往来社
・池田清、野村実ほか、近現代史編纂会（2001年）、『海軍艦隊勤務』、新人物往来社
・坂本明（平成26年）、『ミリタリーユニフォーム大図鑑』、文林道
・森田衛（昭和58年）、『海軍と横須賀』、海上自衛隊横須賀総監部総務課
・吉川和篤（2012年）『上海海軍特別陸戦隊写真集』、大日本絵画
・『上海海軍特別陸戦隊写真帖』（昭和8～10年頃撮影）、海軍省（要確認）、（防衛研究所所蔵）
・吉川和篤（2013年）、『上海海軍特別陸戦隊写真集』、大日本絵画
・歴史群像編集部（2005年）『帝国海軍真実の艦艇史 (2)（歴史群像 太平洋戦史シリーズ Vol. 51)』、学習研究社
・海軍省人事局第3課、『海軍生徒及各学校選修学生採用員数調』、海軍省人事局
・防衛庁防衛研究所戦史室編（1975年）、『戦史叢書第031巻　海軍軍戦備＜1＞昭和十六年十一月まで』、朝雲新聞社
・服部純昌（1986年）、『父子二代海軍戦記－海軍特務士官と学徒士官－』、宝印刷
・海軍編集委員会、『海軍』、誠文図書
・海軍兵学校長（1936年）、『行幸儀禮等に関する件報告。兵學第312号』、（アジア歴史資料センター所蔵）
・大濱徹也（1995年）、『帝国陸海軍事典』、同成社　（p310 定限年齢、p311、給与）
・『昭和16年12月1日～昭和17年1月31日　第18戦隊戦時日誌戦闘詳報』
・『昭和17年5月1日～昭和17年7月31日　第18戦隊戦時日誌戦闘詳報』
・『昭和17年9月1日～昭和17年12月24日　第18戦隊戦時日誌戦闘詳報』

主要参考・引用文献一覧表

・高須廣一、『日本海軍のFCS、その技術的回想（世界の艦船1995年3月号）』、海人社
・『歴史群像シリーズ[決定版]太平洋戦争②開戦と快進撃』、学習研究社（2009年）
・『地図と解説でよくわかる第二次世界大戦戦況図解WWⅡ Illusrated Atlas』、ホビージャパン（2021年）
・防衛庁防衛研究所戦史室編（1975年）、『戦史叢書第38巻　中部太平洋方面海軍作戦＜1＞昭和十七年五月まで』、朝雲新聞社
・防衛庁防衛研究所戦史室編（1975年）、『戦史叢書第49巻　南東方面海軍作戦＜1＞ガ島奪回作戦開始まで』、朝雲新聞社
・防衛庁防衛研究所戦史室編（1975年）、『戦史叢書第83巻　南東方面海軍作戦＜2＞ガ島撤収まで』、朝雲新聞社
・防衛庁防衛研究所戦史室編（1975年）、『戦史叢書　大本営海軍部・連合艦隊（1）開戦まで』、朝雲新聞社
・米田幹雄氏（2023年1月28日）『昭和史セミナー「昭和十七年の戦没者を考える」』セミナー資料、「昭和の日」記念講演実行委員会
https://www.chunichi.co.jp/article/623271
・米田幹雄氏（2018年7月）『近代戦争史と入善町、椚山の戦没者の状況』
・田中宏巳（2017年）、『横須賀鎮守府』、有隣堂
・深井俊之介（2018年）、『戦艦「大和」反転の真相 海軍士官104歳が語る戦争』、宝島社
・髙橋 毅（情報本部 元防衛研究所戦史部所員）、『帝国海軍における人事と教育ー昭和 16 年当時（開戦直前）の人的運用を中心にー』、論文

主要参考・引用文献一覧表

・戸高一成、大木毅（2020年）、『帝国軍人 公文書、私文書、オーラルヒストリーからみる』、KADOKAWA
・昭和3年公文備考巻36、『大禮記念章名簿』、海軍省
・松田源吾他（2017年）、『軽洋海戦史』、潮書房光人社
・野口浩世（「由松」から改名（1992年）、『土木一筋に六〇年』、中西印刷（自費出版）
・木村美幸（2022年）、『日本海軍の志願兵と地域社会 』、吉川弘文館
・国際日本文化研究センター 所蔵地図データベース
・厚生労働省社会・援護局援護・業務課より「野口良作」に係る旧海軍の履歴等

【動　画】
・第69期・海軍兵学校卒業式
https://www.youtube.com/watch?v=Af5UEuML5zk
・[昭和16年] No.CFNH(C)-0043_2「波荒き洋上に巣立つ海の精鋭」（中日映画社）
https://www.youtube.com/watch?v=lZ8zmrMpAll
・軽巡洋艦『天龍』『龍田』 Japanese Light Cruiser TENRYU TATSUTA
https://www.youtube.com/watch?v=1yHZQFiAHtg
・【ゆっくり解説】帝国海軍伝統の夜戦 第一次ソロモン海戦 ガダルカナル島への殴り込み【太平洋戦争】【記録 世界大戦
https://www.youtube.com/watch?v=FxAL0-BF7LE
・#Shorts#大東亜戦争#日本軍#ラバウルとカビエンの占領
https://www.youtube.com/watch?v=go2Kjr7OAwc
・#Shorts#大東亜戦争#美しく清潔なラバウルがゴミ箱のよう
https://www.youtube.com/shorts/DjbUWI18MTk